

社会学伝来考 : 幕末・明治の社会学(1)

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

52

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

190

(終了ページ / End Page)

104

(発行年 / Year)

2005-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021023>

社会学伝来考

—幕末・明治の社会学 [1]

宮 永 孝

はじめに

第一章 日本における社会学移入の淵源

邦語「社会」と「社会学」の起源

社会学とはいかなる学問か

第二章 日本社会学の始祖——西周

西の洋学事始め

西のオランダ留学

西周と社会学

第三章 明治期の日本社会学

ハーバート・スペンサー思想の受容

はじめに

明治十一年（一八七八）八月九日（金曜日）の昼下りのことである。二十日ばかり、おだやかな太平洋を航したのち、ついにこの日、横浜に入港した外国船があった。パシフィック・メイル社所属の蒸気船「北京市」号（シタイ・チア・ベキン五〇六九トン）である。⁽¹⁾

この船には、大勢の中国人にまじって、西洋人の姿もあった。船客の中で人目をひいたのは、若い妻を伴ったアメリカ青年である。この夫婦の身のこなしは上品である。夏服を着ている。夫は背が高く、体はたくましい。目鼻立ちのととのった顔は、や、青白いほうか。

額はひろく、ほほ骨は張っている。一点、ひとの関心を引かずにおかなかつたのは、その緑色の目であった。⁽²⁾

その若者は、神田一ツ橋の東京大学文学部に、お雇い教師として新規に招聘されたエルネスト・フェノロサであった。夫婦は下船すると、その日のうちに汽車で東京へむかい、宿舎がある「カガヤシキ」(旧前田家の加賀屋敷)内の一番館⁽³⁾に旅装をといた。このフェノロサは、のちに大学の講壇から、日本人にむかつてはじめてスペンサー社会学を講じた最初のひとであった。

*

本稿は、幕末から明治二十年代あたりまでの、日本における社会学の歴史的發展を跡づけたものである。日本や欧米を問わず、自国の社会学の歴史について書かれた著述は、いまだにきわめて少ないようだ。西洋哲学に隣接している西洋社会学は、わが国では若い学問なのである。この新^{しん}渡^との学問が、わが国に伝わった歴史について叙述したものは僅^{まじく}少^{せう}であり、その記述は部分的であったり、多少偏していたり、孫引き的であったりする場合が多い。

しかも、どれも無味乾燥な記述で終わっていて、おもしろ味に欠いている。学術論文とは、得てしてそのようなものであろう。わたしが日本における社会学の伝来について関心を抱くに至ったのは、西洋哲学の日本伝来についての研究に端を発している。社会学が明治思想史の一要素であるところから、派生的にこの方面の研究に興味が向いたためである。

西洋哲学もそうであるが、日本の社会学もわが国土に自然発生的に誕生したものではない。ヨーロッパで生まれたものを移植し、それが根づいて今日に至っているのだ。ヨーロッパやアメリカの社会学の機械的輸入に基づいている、とはっきり言い切った学者⁽⁴⁾もいる。

つまり社会学は「輸入学問」だということである。ということは、まだまだ世界的レベルの研究は少ないということか。日本において社会学の研究がはじまり、やがてそれが発展し、こんにちの隆盛をみたのは幕末以来のことである。

その舶来の社会学が移植されてから、すでに一世紀以上も経過しているのに、どういう理由からか、日本における社会学の起源と沿革に関するよい論文をみかけることはない。わたしは元日本大学教授・馬場明男の好書『社会学小史』(エルガ、昭和41・6)の巻尾にみられる「日本社会学研究文献」の中に、「体系的組織的な日本社会学史が上梓されないうちは、日本社会学史は貧困を続けるであろう」⁽⁵⁾の一文に心を惹かれたので、これまでにわが国で刊行された山のような社会学文献の中から関連文献を博搜してみたが、案に相違して、じっさい包括的な良い研究が少ないことを知った。⁽⁶⁾

そこでわたしは、非力ではあるが、その間隙かたげきをうめるために、あえてその略史を叙することにした。わたしの腹案では、明治・大正・昭和の三代に及ぶものを順を追って書きたいと思っている。したがって、本稿はその一斑いっぱんにすぎないことをお断りしておく。

当初、この小史を書くにあたって、多くの不便と困難をともなうことを予想した。豊富な資料に接しうる機会と、それを利用する便宜を得ないかぎり、この種の研究の成功は絶対におぼつかないことを、わたしは過去の体験から十分に知っていたからである。だれもが知っている、月並みなことを書くわけにはゆかぬし、活字にする以上、新しい発見もなくてはならぬと考えたからである。先行研究をそのまま引用することを極力避けたい、と思ひ、資料の収集に多少の困難を覚えたのは事実である。

が、幸い国立国会図書館や諸大学の附属図書館が所蔵する文献資料（論著、雑誌、新聞、論文等）をはじめ、原資料（欧文の珍しい文献、とくに明治期刊行物——多くは貴重本、私記、ノート、訳書の類）にふれ、利用する便宜を得たおかげで、じっさいさしたる困難もなく、仕事は思いのほかはかどった。

実証性のない研究は、空虚であるばかりか、何の学問的価値もないものである。自国の社会学史研究のようなものは、確固たる資料にのっとり書き進めるべき性格のものであるから、当然徴すべき社会学文献は膨大である。その量を思うと気が遠くなる。わたしは閑暇かんかのすべてを使い、うす暗い書庫に関連文献を漁りあさ、ときに貴重書を鈔しょうし、すこしずつ原稿のます目をうめて行つた。

この小論は、多くの先進学者の大小の業績に多くを負うている。しかし、かれらの所論の多くは、概してお雇い外国人フェノロサ以降の社会学から説き起しており、社会学の草分けである西周あまねの影のうすいものである。西を無視したり、軽く触れてすませたりするのは、一つにはかれの言辞（ことば使い）のむずかしさ、難解な漢文で書かれたその言説を理解することの困難さに在るように思われる。

日本における社会学史に関して、まだまとまった研究が少ない現状にかんがみると、この小史が今後の日本社会学史の研究において、反省を促すよすがとなれば幸いである。しかしながら、綿密な考察や表現力、資料不足から、論じても詳らかならず、舌足らずに終つた箇所が多々あることは否めない。

この史的大観の断章が、社会学の日本伝来に関して、そこばくの知識と示唆を与えるものとすれば、筆者の願いはじゅうぶん達せられたことになる。

*

日本における社会学の沿革について語るとき、その渡来史から説きおこすのが常道である。しかし、西洋社会学がわが国に移植される以前、日本の社会的な事象（人間社会の現象や生活）について、何らかの社会的な見方や考察、社会論は存在したのであろうか。

社会学出現の契機は、社会的変革期にある、といった見地から、記紀（古事記や日本書紀など、勅撰の史書）が、皇室を中心とする日本民族国家の指導原理（一君万民といった一体主義、皇室中心の歴史的事実の再現強化をいう）の書として、日本社会学の建設に大きな科学的な役割をもっている、と立論した学者もいる（河合弘道『日本社会学原理』昭森社、昭和18・1）。

また一方では、儒教的な思想の歴史のなかに、理論的な社会観の基礎となる考えがみられる、といった説を立てた学者がいる。

漢学は人としての道や倫理を説くものであるが、帆足萬里（一七七八—一八五二、幕末の儒者・蘭学者）の主著『窮理通』（安政三年「一八三六」の成稿、オランダの科学書からえた知識を包括的に述べたもの）は、大界・小界・地球・物理・発気・諸生の諸目に分れている。ここにオーギュスト・コントの実証哲学講義における、諸現象生起の順序——科学の順序との一致がみられる、という（蔵内數太「幕末明治の社会学」

『戸田貞三博士選集 祝賀記念論文集』現代社会学の諸問題』所収、弘文堂、昭和24・1）。

第一章 日本における社会学移入の淵源

邦語「社会」と「社会学」の起源。

日本社会学の発展をたどろうとすると、まず「社会」とか「社会学」といった語の考証からはじめるのが穏当であろう。

われわれがふだん用いている「社会」といった言葉は、いまでは政治、経済と並んで日常的に使用されている。けれどこの語が初めてわが国で使われたのは、明治初年のことであった。「社会」といった名称は、昔からわが国にあった言葉ではなく、明治維新前後に外国文化が移入されるに及んで、外国語 (society [英], société [仏], Gesellschaft [独], sociëit [蘭]) から初めて邦訳した名称であった。

ヨーロッパにおける「社会」の観念は、すでにストア学派に誕生した。社会を意味する societas (ラテン語) は、ギリシアの都市国家 (ポリス) に対立して、人間の団結体を意味した。セネカ (ローマのストア派の哲学者、政治家、キリスト紀元前四?—西暦六五) は、「神は人間に『理性と社会』 ratio et societas の二つの贈物を賦与す」と述べている。

「社会」は、人間が集まって生活をする集団や世の中とか世間を意味する言葉である（岩波『国語辞典』）。いまわれわれが用いている「社会」

が誕生するまで、この言葉と同義に解されていた昔からあった名称は、「世間」「世の中」である。

「世間」といった呼び名は、古くは「天壽國曼荼羅」(大和中宮寺が所蔵する繡帳)にある、聖徳太子の有名な句「我大王所告、世間虚假唯佛是新」(わがだいおうつくとくるところ、せけんこけにして、ただほとけのみ、これあらたなり)にみられる、仏教教学上の名称である。

この「世間」という語は、その後わが国においてしだいに普及した感があるが、安土桃山時代には、その代用語として「寄り合い」も用いられなようにも見える。一六〇三年(慶長八)に長崎のイエズス会のコレジオで刷られた『日蘭辞書』(Vocabulario da Lingoa de Iapam, Anno M. D. CIII. p.324)には、"Yorai: Ajuntamento" (よりあい——会合すること)の語がみられるからである。そして江戸中期から明治前期にかけて、「社会」を意味する各国語を訳すに当って、「世間」や「寄り合い」といったことを捨て、新しいことを創ろうとした。識者は「社会」を意味する外国語(とくにオランダ語、フランス語、英語)を訳す際にひじょうに苦心したのであるが、いま古い順に訳語の変遷をみてみよう。

(ゲノオツシュツ)
genootschap 交ル 集ル(稲村三伯編の『蘭日辞典』(『ハルマ和解』または『江戸ハルマ』ともいう。寛政八年〔一七九六〕二月刊、二十冊本)。

Society 侶伴 ソウバン(侶伴とは「ななかま」「みちづれ」の意。本木庄左衛門編『語厄利亜語林大成』、文化十一年〔一八一四〕六月完成、長崎本は四冊合綴。大槻文庫のものは、第十一冊目にこの語がみられる)。柳父章『翻語成立事情』岩波書店、昭和五十七年刊を参照。

genootschap 寄合 又 集合(桂川甫周編『和蘭字彙』、安政五年〔一八五八〕五月完成、十七卷)。

Society, f. 仲間交り、一致(開成所編『英和对訳袖珍辞書 A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language, 文久二年〔一八六二〕江戸開板)。

société, f. 仲間。懇(けん)交り。(村上英俊『仏語明要』卷之四、達理堂蔵版、元治元年〔一八六四〕刊)。

Society, a 簽證会(イギリス人スウェルズウエレン)『英華字彙』An English and Chinese Vocabulary, 松莊館翻刻蔵板、明治二年〔一八六九〕刊)。

Society, s 仲間交り。一致。『和訳英辞書』An English-Japanese Dictionary, American Presbyterian Mission Press, Shanghai, 1869, 明治二年〔一八六九〕刊)。

Society, n. …………… 会^(ロウソク) 結社。(羅布存德原著 井上哲次郎訂増) 『英華字典』藤本氏藏版 *An English and Chinese Dictionary*, by the Rev. W. Lobscheid,

published by J. Fujimoto, Tokio, 1884, 明治十七年〔一八八四〕刊)。

Society, (各) …………… 社会。社^(カヤ) (民衆の組合の意一引用者)。会。仲間。組合。会友。(尺振八訳『明英和字典』六合館藏版) *An English*

and Japanese Dictionary, for the use of junior students, by Sekey shimpachi. together with *A Biographical*

Dictionary, published by Riku-gō-kuwan, 1884, Tokio, 明治十七年〔一八八四〕刊)。

Society …………… 交際。社友。会社。社会。連衆。合同。(文学士棚橋一郎訳『英和双解字典』丸善商社藏版) *An English and*

Japanese Dictionary of the English Language by P. Austin Nuttall, Translated by I. Tanahashi. Z. P. Maruya & Company. Tokyo, 1885.

Society …………… 社会。会社。連衆。公衆。交際。合同。社友

Sociology …………… 社会学。交際学。世態学(博言学士イーストレーキ共訳) 第二版『ウエブスター氏和訳字彙』東京三省堂版 *Webster's un-*

abridged Dictionary of the English Language, translated into Japanese by a Committee Edited by F. Warrington Eastlake and Ichiro Tanahashi, Bungakushi. New Edition. C. K. Sanshodō & Co, Tokyo, 1888. 明治二十一年〔一八八八〕刊)。

Sciences —, shakwaigaku …… 社会学(佛和小辞典) 『Petit Dictionnaire Francais-Japonais pour la conversation par E. Raguet, M. A.,

Tokyo, Sansaisha, 1905. 明治三十八年〔一九〇五〕刊)。

society …………… 『集合』社会。世間。(何)社会。(殊に)。交際社会。交際界。人中。社交。交際。協会。(何々)会。

sociology …………… 社会学。

—— gist …………… 『名』社会学者。斎藤秀三郎『携带英和辞典』日英社。Saio's *Vade Mecum English-Japanese Dictionary*, 大正十一年〔一九二二〕刊)。

注・()内のルビは引用者による。

「社会」を意味するその他の邦訳語として、つぎのような例を掲げることが出来る。

- 風俗、民族……………神田孝平
- 仲間会社、仲間
会所、衆人結社……………中村敬宇
- 公会、人間公会……………津田真一郎
- 人間会社、人間仲間……………津田真一郎、杉亨二
- 党、人間相生養之
道……………西周
- 社……………西周、小幡甚三郎
- 俗間、世俗、俗化、
会 人間世俗、衆民……………室田充実
- 会合
- 人間公共……………杉亨二
- 公社……………庵地保
- 世交……………森有礼
- 世間……………福沢諭吉、永峰秀樹
- 交社……………土井光華
- 交態……………塚本周造
- 社交……………西周、深間内基
- 会社……………福沢諭吉、福地源一郎、加藤弘之、西周、東京大学
- 交際……………福沢諭吉、加藤弘之、塚本周造、高橋達郎
- 世態……………福沢諭吉、小幡篤二郎、井上哲次郎、東京大学
- 社会……………福地源一郎、津田僊、永峰秀樹、福沢諭吉、西周、外山正一、東京大学⁽¹⁾

これらの語のうち、とくに注意を要するのは、「会社」「交際」「世態」「社会」などの邦訳語である。このうち「社会」が他を制して勝利をおさめ、盛んに用いられるようになった。

つぎに当時の識者がじっさいどのように社会の邦訳語を文章の中で用いているか、その具体例をみてみよう。

まず「会社」といった名称から見ると、この語は、かならずしも今日われわれが用いている、商行為などを業とする社団法人を意味するのではなく、広義の学校、学会、銀行、国家、教会などをも表わした。

福沢諭吉の「慶應義塾之記」（慶応四年「一八六八」四月）の中に、

今爰に会社を立て義塾を創め、同志諸子相共に講究切磋し、以て洋学に従事するや、事本と私にあらず（後略）⁽¹²⁾

とある。しかし、同人の「西洋事情 卷之一」（慶応二年）にみられる「商人会社」あたりになると、今日の会社の意にちかい。

商人会社

一 西洋の風俗にて、大商売を為すに、一商人の力に及ばざれば、五人或いは十人、仲間を結て其事を共にす。之を商人会社と名づく。⁽¹³⁾

また加藤弘之訳ブルンチュリ著「国法汎論」（明治五年稿、明治十二年「一八七九」版）では、会社を国家や教会の意として用いている。

政治法制ノ為メニ結ヘル会社（「按」即ち国家ナリ）及ヒ教導ノ為メニ結ヘル会社（「按」即ち教会ナリ）ナル二個ノ会社

とある。⁽¹⁴⁾

中村敬宇訳ミル原著「自由之利」（明治五年）の中で、いまでいう society（社会）は「会社」と訳されている。「ソサイテイ仲間会社」がそれである。また津田真一郎は、フィッセルング教授の講義「表記提綱」（明治七年「一八七四」）において、société（蘭・「社会」の意）を「人間会社」と訳した。

society の訳語としての「交際」といった名称は、明治初年に福沢諭吉、加藤弘之、中村敬宇、塚本周辺らによって用いられた。福沢は「故に

文明とは人間交際の次第に改りて良き方に赴く有様を形容したる語（文明論之概略 卷之一）という。塚本周造訳チェンバー原著「論理学」（明治十一年「一八七八」）では、societyは「交際」、sociologyは「交際学」と訳されていると云う。⁽¹⁶⁾

「世態」なる邦語をはじめて使用したのは福沢諭吉であったようである。「文明論之概略」（明治八年「一八七五」）の中にこの語をみる。societyやsociologyの訳語としての「世態」、「世態学」は、明治十年代東京大学文学部において採用された。⁽¹⁷⁾

英語のsocietyをはじめて「社会」と訳した日本人はだれであったのか定かでないが、どうも福地源一郎（一八四一〜一九〇六、明治期のジャーナリスト、『東京日々新聞』の主筆となり、政府擁護の筆をふるう）がその人であったようである。『東京日々新聞』（第九〇六号、明治8・1・14付）の論説の中に「社会」なる語が出てくる。

（前文略）此安宅君ハ必ラス完全ノ教育ヲ受ケ高上ナル社会ニ在ル君子タルヲ スルヲ得ルニ付 吾曹（われらの意）引用者 カ浅見寡識ヲ顧ミズ（後略）

吾曹ハ勉強ト経歴トノ援助ヲ以テ 漸ク高上ナル社会ニ加ハラシム事ヲ祈望ス

注・傍点は引用者による。

福地は「社会」なる語に、わざわざ「ソサイチー」とふりがなを付している。かれはその後も「社会」という語を論説の中でたびたび使用した。たとえば「人民社会」（『東京日々新聞』同年9・23付）や「文明社会」（同紙、同年11・30）がそれである。

箕作麟祥（一八四六〜一九七、明治期の啓蒙的官僚学者）は、明治八年十一月刊の訳述カスバル・ホフキンス原著『万国政体論』中外堂（原題は

Manuel of American Ideas, 1873）の中で「社会」なる訳語を使っている。

政府ノ原因

第四節 社会ニ於ケル法律ノ主眼ハ 此人ノ彼人ヲ害セント為ス心ニ出テタル悪業ヲ制シ 且ツ之ヲ罰スルニ在リ（後略）
 社会上ノ自由トハ 公益ヲ主旨トスル 法律ノ外ハ 何等ノ法律ト雖モ 其束制ヲ受ケサルヲ云フ（卷之一）

永峰秀樹訳仏国ギゾー原著『欧羅巴文明史』(奎章閣、明治九年、原題は *History of Civilisation in Europe, 1873*) の中にも、「社会」の語が出てくる。

当時ノ市民ハ 概シテ無智兇猛ニシテ 頗ル野蛮ノ状アルヲ以テ其管理更ラニ為シ難キアリ 是ノ如キ社会ノ中ニハ 久シカラスシテ 人民ノ安固ヲ失フヘキハ 猶ホ往日豪族ノ中ニ住シタル市民ノ如ク次第二(後略)

「ヒリップ」二世ノ在位中ニ至ルマテノ中ニ 仏国ノ大都市(都市一引用者)ハ 社会ヲ結び市事ヲ議シテ之ヲ挙行スル(卷之一)

明治十年前後から「社会」の訳語も定着した感があるが、その後この訳語が民間に広まって行った推移をみるために、明治期の雑誌記事や著訳書の中から社会に関連した語をひろうと、つぎのようになる。

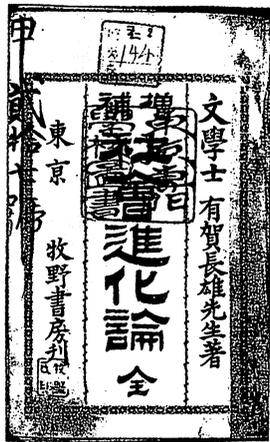
- 上等社会、社会……………『家庭叢談』(第十三号、明治9・10)
- 社会、上等社会……………『家庭叢談』(第二十八号、明治9・12?)
- 社会、社会上、人間社会、下等……………『家庭叢談』(第四十二号、明治10・1?)
- 人間社会……………『学芸志林 第一卷』(明治10・1)
- 社会、社会所……………英国彌留氏原著 『利学』(明10・5)
- 社会、上等社会……………西周訳述
- 野蛮社会……………『開成学校講義室発会演説』(明治10)。
- 社会……………英国波斯遜鎮著 『権理提綱 同権本論 尾崎行雄訳 男女同権論 父子同権論』(明治10・12)
- 社会……………『学芸志林 第三卷』(明治10・12)



雑誌『家庭叢談』
(明治9・10)

[東京大学「明治新聞雑誌文庫」蔵]

- 社会……英国波斯邊鎮著『權理提綱 地』(明治11・3)
尾崎行雄訳
- 官 整 社 会……鈴木義宗訳述『斯迦 代議政体論 全』(明治11・10)
チャンバ | 原著 『論理学』(明治11・12)
塚本周辺訳
- 人間社会……米 国 トンプソン氏著 『交際論 初編二』(明治12・2)
加藤政之助訳 『附経済』
- 社会進歩、社会生活……『農業雑誌』(第九十九号、明治13・2)
- 社会の便益……土居光華批評『偶 西先生論集 全』(明13・4)
蒼生拳三編次
- 人間ノ社会、社会ノ交際……『学芸志林 第七卷』(明治13・7)
- 社会、原人ノ社会、文明ノ社会……斯迦瑣著『社会平権論 完』第三版(明治14・5)
松島剛訳
- 社会……加藤弘之「自由権之進化 材料第一」(明治15)
有賀長雄『社会進化論』卷之一(明治16・9)
- 社会ノ開花……『明治十六年 盛衰記 全』(明治17・2)
各政党
- 社会……日本社会……文学士有賀長雄著『族制進化論——社会学三卷』(明治17・6)
- 社会、古代社会、村族社会……『学芸志林 第十六卷』(明治18・1)
- 社会、社会ノ百事百業……ヘルベルト、スベンセル原著 『社会学之原理 第一卷』(明治18・4)
乗竹孝太郎訳述
- 社会学、社会……英国スベンセル氏著 『社会学之原理』(明治18・4)
日本乗竹孝太郎訳
- 社会学全体、全社会……農学士菊池熊太郎著述『男女心理之区别』(明治20・1)
- 文明社会、野蛮社会……文学士有賀長雄先生著『補 社会進化論 全』(明治20・2)
- 生物社会……
- 社会学者、ソシヤロジ、社会学、サイチ、社会、人間社会、社会体制、社会発生……



有賀長雄『補 社会進化論 全』(明治20・2)



『明治16年各政党 盛衰記 全』(明治17・2)

[早稲田大学中央図書館蔵]



加藤政之助訳『交際論 初編1』(明治11・10)

社会哲学、社会学、
社会ノ幸福、社会

『哲学会雑誌』(明治20・2)同年9)

社会仮粧舞……………三木愛花仙史戯著『百鬼 社会仮粧舞』(明治20・11)

学者社会……………松木董宣『新思想 教育競』(明治20・12)

社会の進化……………『哲学会雑誌』(第二十七号、明治22・5)

一国一社会、社会の主動力……………天眼子著『国民の真精神 全』(明治26・9)

社会進歩、社会人間社会……………『中央學術雑誌 第二卷第十三号』(明治26・10)

社会、社会学、社会現象、社会の標本……………洪江保著『社会学 全』(明治27・1)

社会、我社会……………大和田建樹著『明治文学史 全』(明治27・10)

当時の社会、讀書社会……………『明治三十年史』『大陽 第四卷第九号臨時増刊』所収(明治31・4)

社会の活舞台、社会社会改良、社会腐敗、社会の人間、社会的人物……………荒木鷲泉合著『社会と文学』(明治34・2)

社会、社会学、社会の人民社会的進動、社会的造構……………文学士建部遜吾講述『社会学原理』(明治34・3?)

英語の society という語を、はじめて「社会」と翻訳した邦人は誰であったのか。このことは日本の社会学史上、ながいあいだ未解決の問題とされた。有賀長雄(二八六〇—一九二二、明治・大正期の法学者、社会学者)は、自著『補 社会進化論』(明治二十年「二八八七」)の総論 第一節の中で、「英語の「ソサイチイ」といふ字を社会と翻訳するは、誰れの始めし事なるや知らず余輩の識るところをもってすれば、支那人のこの字を用いるに至りしは、宋以後のことなるべし」と述べている。

いずれにせよ、この「社会」なる訳語は、明治十年以前から使われたことは文献資料から証明できるし、その後このことばは漸次流行するに至った。

それでは、この「社会」なる語の出所はなにか。これよりその出典について述べてみよう。わが国で刊行された代表的な国語辞典や漢和辞典は、



洪江保『社会学 全』
(明治27・1)



松木董宣『新思想 教育競』
(明治20・12)

[早稲田大学中央図書館蔵]

それぞれつぎのような語源と釈義をあたえている。

——しゃかい「社会」〔近思録治法「郷民為_ニ社会_一」(society)の福地校痴による訳語。〕
 ① 人間が集まって共同生活を営む際に、人々の関係の総体が一つの輪郭をもって現れる場合の、その集団。② 世の中。世間。(岩波書店『広辞苑』第五版)。

——しゃかい「社会」『名』(近思録——治法類)の「郷民為_ニ社会_一為立_ニ科条_一旌_ニ別善惡_一、使_ニ有_レ勸有_レ恥_一」から出た語)① 人々がより集まって共同生活をする形態。また、特に明治八年(一八七五)、福地源一郎(桜知)が英語の society の訳語としてこの語を用いてから、近代の社会学では、自然の_レであれ人為的であれ、人間が構成する集団生活の総称として用いる。

家族、村落、ギルド、教会、階級、国家、政党、会社などはその主要な形態である。② 一般的に、家庭や学校をとりまく世の中。世間。(小学館『日本国語大辞典 第十巻』)。

——しゃかい(名)「社会」(一) 同ジ趣キノ人人。同流の仲間。(富山房『新編大言海』)。

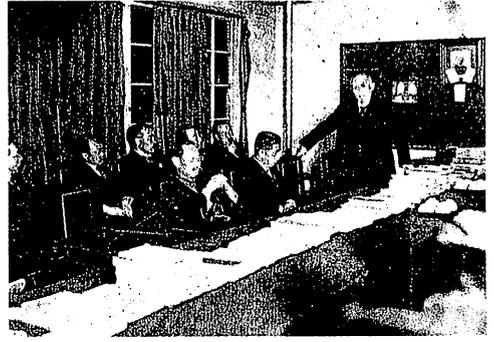
——「社会」クワイ ① 社_{ヤシヤ}の会合の意。社日、又は節日(祝祭日——引用者)に行った御村住民の会合。② 郷村の人民が相互の向上のために作った組合。「近思録、治法」郷民為_ニ社会_一為立_ニ科条_一、旌_ニ別善惡_一、使_ニ有_レ勸有_レ恥_一。③ 共同生活をする人類の団体、又は組織。④ 同種類の範囲。なかま。

⑤ 人の世の中。世間。(大修館書店『大漢和辞典 卷八』)。

要するに「社会」なることは、明治初期に中国から移植した漢語であるようだ。もともと中国では、社会といった語はあまり使われず、元、明、清の時代、廢語または死語に近かったとい_レう。⁽¹⁹⁾

近思録とは、宋の朱子、呂東萊らが編んだ中国の儒学書十四巻のことである。「近思録卷之九——治法類」をみると、たしかに「郷民為_ニ社会_一。為立_ニ科条_一。旌_ニ別善惡_一。使_ニ有_レ勸_一。有_レ恥_一。」(きようみんしゃかいをなす、ためにかじようをたて、ぜんあくをしようべつし、つとむることあり。はずることあらしむ⁽²⁰⁾)の一文がみられる(『漢文大系 第二十二巻』富山房、大正5・10)。

つぎに「社会学」といったことばの起源とその呼び名の中味について述べてみよう。明治初年に sociology (英)、sociologie (仏)の語が、わが国に移植されたとき、人間学・交際学・世態学などと訳された。のちこれらの三語にこんにちわれわれが使っている社会学が加わるのだが、こ



正面の立っている人物が、井上哲次郎。東京帝国大学社会学研究室創立25周年記念会場の当日の様様を写したもの（昭和3・3・7、東大山上会議所）。

『社会学雑誌』第48号所収。

の語のみ生き残り、他は死語となった。

幕末から明治十年代にかけて刊行された、仏・英・蘭の対訳辞典をみても、見出語として *sociologie, sociology, sociologie* の語は見当らない。しかし、尺新八訳『明治英和辞典』（六合館蔵版、明治17・4）だけは、“*sociology*（名）社会学。世態学。”といった風にのせている。

明治初年は英語全盛時代でもあったが、いったい誰がいつごろ、英語の *sociology* の語を邦訳したのであろうか。『広辞苑』は、オーギュスト・コントの造語である *sociologie* を社会学と訳したのは外山正一^{（ましかず）}である、としている。『大漢和辞典 卷八』（大修館）も「コントの造語 *sociologie* を外山正一が訳した語といふ」。

社会学講義の嚆矢は、明治十一年（一八七八）八月に来日したアメリカ人フェノロサが、東京大学文学部において行ったものがそれであるが、当時文学部内でも *sociology* をどのように訳すべきか盛んに論議されたようだ。外山正一（一八四八〜一九〇〇、明治期の哲学者、教育家、のち東大総長）は、はじめから「社会学」「社会学」を採った。一方、当時学生であった井上哲次郎（一八五五〜一九四四、明治・大正期の哲学者、日本にドイツ観念論哲学を輸入した）は、「世態学」「世態」なる邦語を採用した。^{（21）}

昭和三年（一九二八）三月七日（水曜日）の午後五時より、東大山上会議所（山上御殿）において、東京帝国大学社会学研究室創立二十五周年記念会が開催されたとき、井上哲次郎は席上、外山正一のエピソードや社会学や社会学といったことばの始まりについて貴重な証言を行なった。

——つぎに社会学といふ言葉の起原についていま記憶をたどって一言したい。そも社会といふ文字は、支那では私のみた書物のうちでは『二程全書』と『近思録』とのうちに出てきているのが最初ではないかと思ふ。『二程全書』巻二十九に曰く「郷民為_二社会」。為_二立_三科条。旌_二別_三善惡。使_二有_レ勸有_レ恥」近思録巻九にこの文を引用したのである。

ここに社会といふのは、もちろん今日用いているような広い意味のものではない。日本で *society* を社会と訳し出したのは誰であるかは知らぬが、とにかく日々新聞の社説に、社会なる言葉を使ひはじめたのは福地源一郎氏であった。

ところが社会といふ言葉では、どうも言ひ表はし悪い society がある。それで社会といふ文字を倒にして（ひっくり返す——引用者）会社ともした。会社といふ文字は全く新しく造ったのである。

ところで社会学といふ言葉を使用したのは外山博士であります。私は『哲学字彙』に sociology を世態学と訳しておきました。これには加藤弘之博士も賛成してをられた。社会学といふのは、何だかおかしいと思った。だから当時大学の学科課程に世態学としてあったのである。

ところが外山博士はつねに社会学といっている。世態学では、家政学のようにも聞えるから馴れてみれば、やはり外山博士が大学で創められた社会学のほうが良いのであります（『東大社会学研究室創立廿五年記念会記事』『社会学雑誌』第四十八巻所収、昭和3・4）。

井上哲次郎は、この談話の中で、sociology を世態学と訳しておいた、と語っているので、『哲学字彙』（明治14・4）開くと、その八十五頁に社会に関する語として、

Socialism	社会論
Society	社会
Sociology	世態学

などが掲げてあった。

つぎに「社会学」という学名がはじめて文献に表われた例について述べてみたい。

いま一般に用いられている『社会学』を最初に使用したのは尺振八ではないかと考えられている。尺振八は明治十三年（一八八〇）四月、スペンサーの教育論その他（H. Spencer: *Education, Intellectual, Moral, Physical*, 1875, New York）を『斯氏教育論』と題して刊行した。

同書の「何を以て最大の価値ある学識とするやを論ず」の中に、『社会学』の語が出てくる。

茲に又人生事業の成否に直接の関係を有し、吾輩の常に注意せざるべからざる一科の學術あり、社会学なるもの則是なり、今夫れ日々金錢通利の景状を考へ、貨物の時価を察し、予め穀物、綿、砂糖、羊毛、絹等の収獲の多少を^{不明}し、戦争の勝敗を計り、以て商業上の処置法を判決する人は、即

ち、社会学を学べる者と謂ふべし、

其行ふ所は固より経験上の臆断を逞ふするに過ぎずして、許多の誤謬を免れざるべし、然れども尚其考究判決する所、善く真理に合ふと否らざるに由て、或は賞賛を得、或は利得を失ふ所の社会学の生徒なりと謂はざるを得ず（後略）

当時 sociology を社会学と訳すことに抵抗を覚えたのは、学界で権威をふるう立場にあった人々であった。井上哲次郎は語っている。

東京大学において sociology の訳語を極めようといふ際に、そう簡単に社会学としたのではなかった。社会に学といふ字をくつつけるのも可笑しいからといふので、自分はこれを世態学としたならば、よろしかろうとこういった所が、加藤博士がそれがよろしかろう、と賛成されたので、東京大学では一時世態学といふ名称を用ふることになった。

（井上哲次郎「我邦に於ける哲学術語の起源（其一）」『哲学雑誌』第四十五卷・第五二四号所収、昭和5・10）。

これまで英語の sociology を『社会学』と訳した者として、尺新八、外山正一などが考えられるが、有賀長雄もあるいはその中の一人ではなかったかとも考えられる。有賀は『哲学字彙』の編纂に携わっていたし、社会学に関することば、たとえば community（社会）、socialism（社会論）などをはじめとし、その他多くの術語を訳していることから伺われるという（下出隼吉「明治社会学史資料」『社会学雑誌』第十八号所収、大正14・10、七四―七五頁）。

すでに述べたごとく、わが国ではじめ sociology を翻訳する際に、『人間学、交際学、世態学』などと訳して、なかなか訳語が定まらなかった。が、sociology の訳語『社会学』が新たに誕生し、やがてそれがすっかり根をおろし、不動のものになったのは、下出隼吉によれば、乗竹孝太郎訳述『社会学之原理』（原書はスペンサーの *The Principles of Sociology*, 1st vol. 明治十五年「一八八二」刊）以後ではないかという。⁽²²⁾

乗竹は刊行するに当って外山正一の関をうけており、また外山は当時流行しはじめた新体詩（西洋の詩の形式を採り入れて作った詩）によって「序」を書き、その中で「社会の事も皆都て」とか「社会の学の原理をば、書にもものせらるる最中ぞ」と記し、さらにその末尾において「政府の舵を取る者や、輿論を誘ふ人達は、社会学をは勉強し能く慎みて軽卒に、働かぬ様願はしや、明治十五年四月、山外山一識（八頁）と書いてい

る。

同書の「凡例」に、「社会学之原理ハ 英国学者ヘルベルト・スペンセル氏ノ著述ニシテ 原名ヲ『プリンシプルス、ヲフ、ソシヤロジー』ト云フ」とあり、原文に拘泥せず訳したものであるという。

また訳者は「原序」において、「社会学ヲ論スルノ学問ヲ称シテ『ソシヤロジー（社会学）ト云ヘル』と訳しているが、これ以後、一般に「社会学」という学名が用いられ、こんにちに至ったものようだ。

つぎに社会学とはいかなる学問か。それはいつだれが創始したのであるか。まず社会学の定義について述べてみよう。もっとも簡単に説明すれば、それはヨーロッパで生まれた科学であつて、社会の組織、その発達、変遷などを調べ、研究する学問のことである（『新編大言海』富山房）。また社会関係や社会組織の現象・法則などを対象とする学問である、と『国語辞典』（第四版、岩波書店）は説明している。が、これは『大漢和辞典 卷八』（大修館書店）の釈義に少し手を加えて孫引したものである。

いちばん平易な説明は、社会学とは「社会を研究する科学である」（『社会学辞典』河出書房、昭和19・8）とか、「人間の共同生活を研究する社会学の一つ」（『日本国語大辞典 第十卷』小学館）であろう。わたしは社会学とは、どんな学問か知るために過去、現在の専門的辞典を調べ、そこに載っている記事を読んでみたが、大半が難解な記述であり、頭の中に入ってこなかった。

他方、外国の文献や事典などは、どのような解説をあたえているか調べてみると、やたらと説明がくわしかったり、簡単に片づけているものなど、まちまちであつた。

たとえばフランスの『十九世紀世界大辞典』（*Grand Dictionnaire Universel du XIX^e Siècle*, 1875）などは、社会学の定義として「政治的、社会的諸問題の科学」といい、またポール・ゴウリエ著『社会学の原理』（Paul Gaugier: *Éléments de Sociologie*, Marcel Rivière & C^e, 1913, p.15）などは、「社会学とは抽象的な科学であり、その目的は社会的現象を統御する一般の法則を探究すること」と説明している。

またルネ・ユベール著『社会学の基礎便覧』（Rene Hubert: *Manuel Élémentaire de Sociologie*, Librairie Dalain, 1935, p.1）は、「社会学すなわち社会科学は、社会的事実についての学問である。社会的事実と呼ばれるものは、社会を特徴づけているすべての制度である」という。

『オクスフォード英語大辞典』（*The Oxford English Dictionary*, 1933）によると「社会学とは「人間社会の起源、歴史、組織などを研究すること」をいう。



(上) オーギュスト・コントの肖像
 (下) パリのムッシュル・フランス街10番地にあるコントの家の講義室 (日本大学社会学研究室『社会学論叢』7) より。

である。

つぎに社会学の先駆者——社会的テーマを取扱った先例、先達について述べてみたい。最古の成文法といわれるハムラビ法典には、社会的関係についての法令の記述が多いといわれるし、コントやスペンサー以前の古代ギリシャ・ローマ時代には、もとより社会学といった名称も学問もなかったが、すでに哲学者・政治学者、経済学者、歴史家らは、国家や政治や社会のことを哲学的に論じた。⁽²⁴⁾ギリシャの哲学者アリストテレス(紀元前三八四―三二二)は、人間はすべて政治的、社会的動物である、と断定した。⁽²⁵⁾

社会学誕生の思想的萌芽は、ヴィーコ(一六六八―一七四四、イタリアの哲学者)、テュールゴー(一七二七―八一、フランスの経済学者、政治家)、モンテスキュー(一六八九―一七五五、フランスの政治哲学者)、コンドルセ(一七四三―九四、フランスの数学者、社会哲学者)、ヘルダー(一七四四―一八〇三、ドイツの哲学者、作家)、ヘーゲル(一七七〇―一八三一、ドイツの哲学者)などに至り、かれらは歴史的事実から社会学的原理を概括することによって、人間にかかわる問題を研究しようとした。⁽²⁶⁾

その他、ヨーロッパの社会学者が下した定義を若干しめると、社会学は「社交の勢力、形状およびその発達を研究する学」(ジンメル)とするもの、「社会学は心意連合の学である」(ギージングス)とするもの、「社会学は人間社会をして幸福ならしむる学である」(チェツク)、⁽²⁷⁾「社会学は社会の構造機能の学である」(伊・グロッパリ) ⁽²⁸⁾などがある。

いま述べたような定義や概念をもうすこし詳述すれば、社会学は社会の形、有様、勢力、進歩 ⁽²⁹⁾などを究める学問である。社会学が学問的にはじめて成立したのは、フランス革命後の混沌と不安の時代であり、やがてそれが他の学問テーマと結びついた。社会学は十九世紀前半にオーギュスト・コント(一七九八―一八五七、フランスの数学者、実証主義哲学者)やハーバート・スペンサー(一八二〇―一九〇三、イギリスの哲学者)によって、はじめて学問的に体系化されたもの

フランスのオーギュスト・コントは、社会学の父と呼ばれている。かれは実証主義（形而上学的な思弁によらず、事実を根拠とし、観察と実験により理論をたしかめる立場）を振りどころとして、それを社会現象に適用し、社会についての独自の学問体系を創出し、それを社会物理フィジック・ソシヤル（*physique sociale*）すなわち *sociologie* と命名した。

この *sociologie* という語は、コントによって創られ、かれによって自著『実証哲学講義』【全六巻】（*Cours de philosophie positive*）の第四巻の中で使用された。それはラテン語の *socius*（仲間）とギリシャ語の *λογος*（ことば）との合成語である⁽³¹⁾。

コントは四巻が刊行される一八四二年以前、社会学のことを *physique sociale*（社会物理）と呼んでいたのだが、『実証哲学講義』の第四巻の中ではじめて *sociologie* なる名称を使用したのである。コントは同書（Auguste Comte: *Cours de Philosophie Positive*, Librairie J.-B. Baillière et Fils, Paris, 1877, p.185）の中で、「いまから、この新しい術語を用いねばならない。この語はすでに紹介すみの、わたしが『社会物理学』と表現したものに正に相当する。社会学という語をあえて使用するゆえんは、この独得の名称によって、自然哲学に欠けている部分を指し示すためである。それは社会現象に特有の、基本的法則の総体についての実証的研究と関係がある」と、社会学という名が誕生した当時もようを語っている。かれは社会学の命名者であったところから、『社会学の始祖』とみられている。

sociologie ということばは、その後各国語に移され、*sociology*（英）、*Soziologie*（独）、*sociologie*（蘭）、*sociologia*（伊）となった。社会学の普及に大きな貢献をしたのは、イギリスの哲学者スペンサーであるが、明治の初年、その著述がわが国に輸入され、同十年代にスペンサーの社会学理論が訳されるに及んで、「社会学」といった名称が使われるようになった。

コントは「社会再組織に必要な科学的な作業案」（*Plan des travaux scientifiques nécessaire pour réorganiser la société*, 1822）という論文の中で、ヨーロッパの危機やフランス社会の混乱を救うために、社会を改造したり、再組織する必要性を唱え、そのためには政治学（社会学の意）を観察科学の域にまで高めねばならないと説いた。

コントは、社会を静と動の二つに分類し、それを静的にみれば『秩序』、動的にみれば『進歩』と考えた。またかれは社会を生物有機体（生活能力を備えた生物）の比ゆを用い、「社会有機体」とも呼んだ。

コントやスペンサーの社会学は、社会現象のすべてを含む、人間社会全体を研究の対象とするところから、総合社会学と呼ばれた。それは社会発展の理論ではなく、より実践的な性格をおびた社会改造の理論といえた⁽³³⁾。

第二章 日本社会学の始祖——西周^{にしあまね}

西の洋学事始め。

西周（一八二九—一八九七）は、わが国における西洋哲学、社会学研究の草分け^{パイオニア}である。文政十二年三月七日、石見国（島根県）津和野において、藩医西時義の長子³⁴として生まれた。幼名は経太郎、元服してからは修亮、周助といい、明治になってから「周^{あまね}」と称した。幼くして祖父時雍^{ときよ}より「孝経」「四書」をさすけられ、十二歳で藩養老館に入り、「五経」「近思録」「文選」「左国史漢」³⁵などを学んだ。

嘉永元年（一八四八）二月、医を罷めて儒学（とくに宋学）を修めよ、との藩命をうけ、ここに学問をもって身を立てる運命がきまった。同年七月養老館の句読を命じられた。翌二年十一月大坂に出ると、後藤松陰（一七九七—一八六四、江戸後期の儒学者、瀬山陽の弟子）の塾に入り、翌年八月まで寄宿したが、書物が乏しく思うように読書できなかった。

のち郷里に帰るが、嘉永六年（一八五三）に、ペリーが率いるアメリカ艦隊が来航したとき、藩主より事情探索の命をうけ、藩士数名らとともに江戸に出た。周助は桜田門外新橋筋の名家の邸内に投宿した。

同年冬、おなじ邸内に住む医師野村春岱^{しゅたい}より、はじめてオランダ文典の手ほどきを受けたが、これは周助がはじめて西欧語を学んだ最初である。時にかは二十五歳であった。それまで儒学を中心に学んできたが、その後すべての学を捨て洋学に専心するために、安政元年（一八五四）三月、父や同僚に遺書を残して脱藩すると、後藤塾で友人であった中島玄覚（江戸・本郷竹町在住）³⁶の家に寄寓した。

脱藩後、オランダ文典（おそらく箕作阮甫著『和蘭文典』のことであろう）の「語法の部」（前編）を大野藩士某に、「文法の部」（後編）を同郷の士・池田多仲（のち玄中、幕府の奥詰医師）について学び、かたわら杉田成卿^{せいけい}（一八一七—五九、江戸後期の蘭学者）や手塚律蔵^{りつぞう}（一八二三—七八、幕末から明治初期の英学者）の塾にも通って、オランダ語の修業につとめた。この間住居は転々と変り、生活もらくではなかったが、蘭学のほうは大いに進歩した。

オランダ語の書物は高価であるため、一書生の身では購入できないので、原書を筆写³⁷せざるをえなかった。当時、周助がもっていた辞引は、『訳鍵』（「ハルマ和解」を抜粋訂正した、簡略の蘭日辞典「二巻」）のみであった。なお、手塚律蔵の塾には、『和蘭陀字彙』（俗に「ツーフ、ハルマ」³⁸という、蘭日辞典「九巻」、天保四年「一八三三」に完成）とジョン・ホルトロップの『蘭英対訳辞書』³⁹を各一部を蔵していたという。

周助は後者の蘭英辞引を塾から借りだすと、それをもとに独学で英語の勉強をはじめたが、英語の発音法はもと漂流民の中浜万次郎から学んだ。安政四年（一八五七）五月、蕃書調所（安政二年幕府が神田小川町に開いた学校。文久二年一ツ橋門外に移転）では、英語を読みうる者を捜していた。このとき手塚律蔵の推挙により、周助は手伝並として採用され、十人扶持を賜わった。すでにオランダ語を学んで約五年、英語を学びはじめて満一年になるときであった。

周助は親友の松岡隣次郎宛の書簡（安政四年「一八五七」二月二十五日付）のなかで英書を研究していることを「今猶ボツ／＼と英学を致居候事（御座候）」と語っている。

かれは津田真一郎とともにオランダ留学の途にあがるまでの約六カ年この蕃書調所の長屋に居住し、鋭意洋学の研究にはげんだ。

ところで周助はいつごろ西洋哲学や社会学の洋書に接したのか。その時期を明確にのべることはひじょうにむずかしい。けれど西洋哲学に関しては、ある程度推測が可能である。かれが西洋の哲学書を読んだのは、おそらく文久二年（一八六二）以前のことと考えられている。⁽⁴⁰⁾

蕃書調所では、主に英語の研鑽につとめていたときであり、オランダ語の哲学書によらず、英語の哲学書に接したもののようだ。

小生頃来（このごろ）西洋之性理之学（本義は、性命「いのち」と理気「宇宙の本体とその現象」を説いた儒教哲学である。ここでは哲学のこと）又経済学杯之一端を窺候処、実に可驚公平正大（片よりがなく、正しく堂々としている）の論に而、従来所學漢説とは頗る端（こと）がらを異にし候処も有之哉に相覚申候。尤彼之耶蘇教杯は、今西洋一般之所奉に有之候得共、毛之生たる仏法（仏教）に而、卑陋（粗末）之極取べきこと無之と相覚申候。

只ヒロソヒー之学にて 性命之理を説くは程未（北宋の大学者・程頤、程頤の兄弟のこと）にも軼（す）き（まさる）、公順自然之道に本（根）を建たるは所謂王政にも勝り、合衆国英吉利等之制度文物は 彼堯舜官（聖天子）天下之意と周召制典型之心にも超へたりと相覚申候。（松岡隣宛書簡）

この書簡は、幕命を奉じてオランダ留学の途に上るべく船に乗る十数日前（文久二年「一八六二」五月十五日）に出したものである。文中、最近、西洋の哲学書や経済学書をよんでいるといい、これまでに学んだ漢書にもないすぐれた内容におどろいたことを伝えている。

「ヒロソヒー」は、おそらく英語の philosophy を音訳したものと考えられるが、当時かれはまだこの語を日本語に訳しかねていたようだ。哲学の意であるオランダ語の ウエイズネールタイ *wijsbegeerte* とか フィロソフイ *filosofie* は、幕末に洋学者によってすでに用いられているが、英語の philosophy が当時わが国の文献に表われた例はひじょうに少ない。

また、このことはまだ誰もいっていないと思われるが、わたしが知る限り英語の “philosophers” (哲学者) が、わが国の文献にはじめて表われたのは天保十一年(一八四〇)のことであった。

しんがわ 渋川六蔵(一八一五〜五一、江戸後期の暦学者、天文方見習、書物奉行のち秘密文書を漏洩した科で豊後の臼杵うすきの稲葉家に幽閉され、三十五歳で没)は、蘭学から英学へと入り、本邦最初の英学書(英文書)である『英文鑑』(上編「天保十一年〓一八四〇」刊、下編「天保十二年〓一八四一」刊)を著した。

同書の「上編卷之六」に、philosophers の語が出てくる。

費録所家ハ ナセリ

Philosophers have made De wysgeeren hebben

大ナル 発見ヲ

great discoveries this in deze eeuur, groote

世 坂令ハ千八百年 時代ト云フカ如シ

century. ontdekkingen gedarn.

費録所家カ当世大ナル発見ヲナセリ

是こゝ当世ト言ヲ以テ過去ヲ用ヒタルナリ 然レドモ左ノ如ク言フトキハ過去現在を用フ

費録所家カナセリ

Philosophers made De wysgeeren maakten

大ナル 発見ヲ

great discoveries last in de vorige eeuur

世 板令八千七百年
時代ト云フカ如シ
century.

groote ontdekkingen.

費録所家カ先世大ナル発見ヲナセリ

渋川も philosophers (哲学者) を日本語に訳せなかつたようだ。おもしろいのは、Philosophers の音を借りて「費録所家」としている点である。その他、『英文鑑』には、哲学に関係した語として、Pythagoras 「ピタゴラス」(人名) や metaphysics (名) 「天地鬼神之論」(形而上学、純正哲学のこと) などがみられる。

Men verkaalt ¹, dat Pythagoras een stizuw, gen ¹¹ van vyf jaren vorderde ¹² van de gemeen, die by onderwees in de wysbegeerte ¹³ 307

ラス」名ハ 費録所費亜 ヲ学フ弟子ニハ 五年ノ無言要セント人 語レリ

(下編卷之三)

渋川は文中において、wysbegeerte (蘭・哲学の意) を「費録所費亜」と訳している。またおもしろいことに英語の metaphysics (形而上学、純正哲学) を「天地鬼神之論」と訳している。

天地鬼神之論

Metaphysics, Bovennatuurkunde.

(下編卷之三)



立っている人物は津田直道。すわっているのが西周助。この写真は渡蘭後、撮ったもの。

ふたたび西周助に話をもどす。

先に引いた西の松岡宛書簡にみられる「ヒロソヒー」は、こんにちわれわれが知っている ^{フィロソフィ} 哲学 という術語のいちばん古い使用例である。

〈1830年代のオランダの地図〉

Karte der Königreiche

HOLLAND

und
BELGIEN

nach der Grenzbestimmung

des
Londoner Tractats

vom
15^{ten} Octbr. 1831.

Stuttgart bei S. Schweizerbart.

Geographische Meilen 1:50000



〔筆者蔵〕

西は Philosophy (英) という語を、

当初「性理之学」「理学」「希哲学」とも

訳していたが、明治七年「一八七四」

『百一新論』において、「哲学」と訳すに

及んで、その後この訳語は一般に用いら

れるようになった。

西のオランダ留学

西はかねて海外留学する希望をもち、

その旨請願もしたが、事は容易に進まな

かった。けれど蕃書調所掛役の大久保越

中守(忠寛)の助力により、ついに文久

元年(一八六二)幕府留学生の一員に加

えられた。

幕府は蒸気軍艦二隻をアメリカに発注

したが、同年春に南北戦争が起つたため

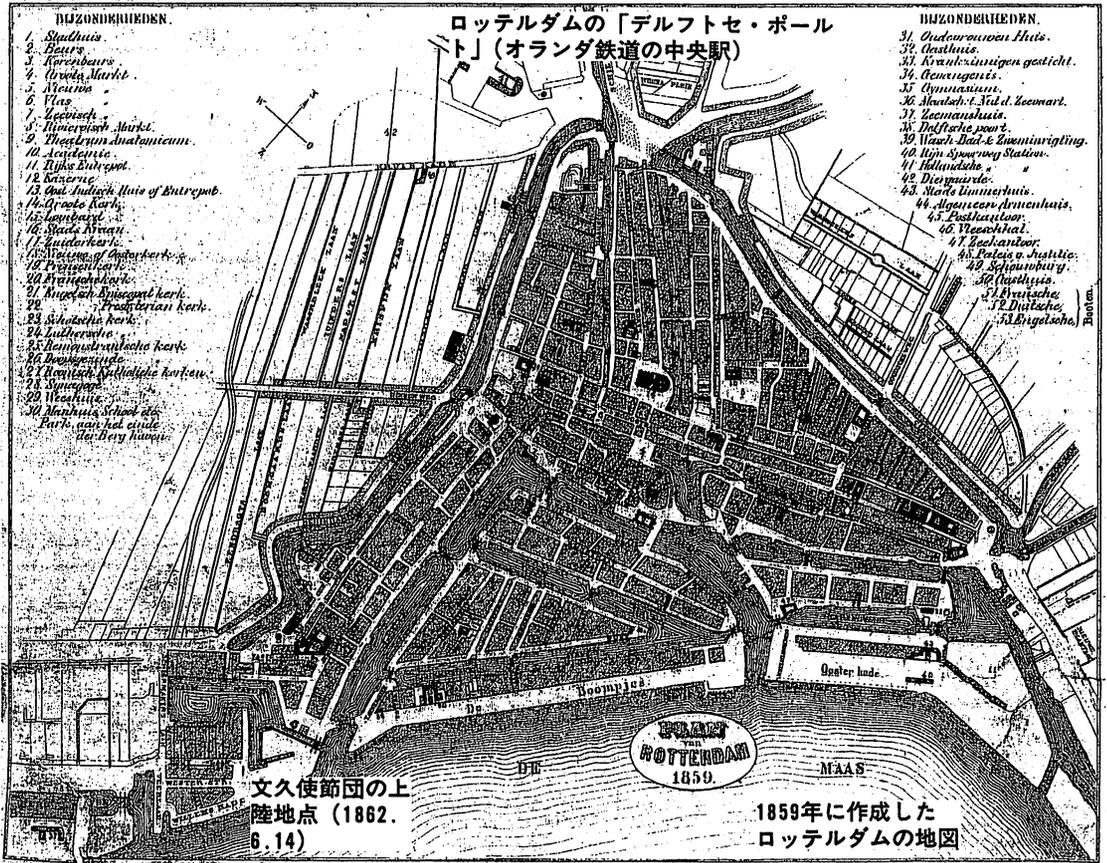
にこの計画は流れ、代ってオランダで軍

艦(のちの開陽丸)を一隻建造してもら

うことになった。同時にこの国の軍事科

学・技術・医学・人文科学を学ばせるた

めに、幕生(士分、工匠、水夫ら十六



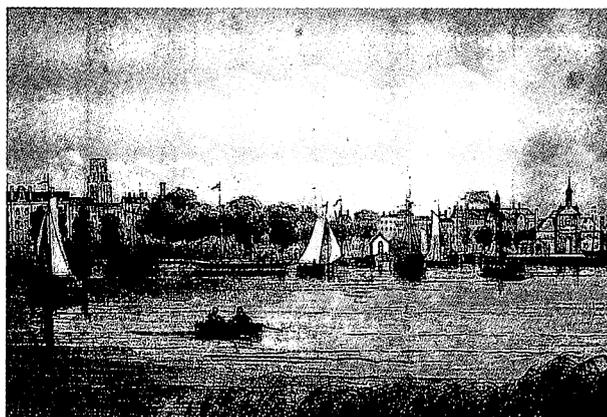
[筆者蔵]

名)を派遣することに決し、西は津田真一郎とともに蕃書調所から一行に加わった。

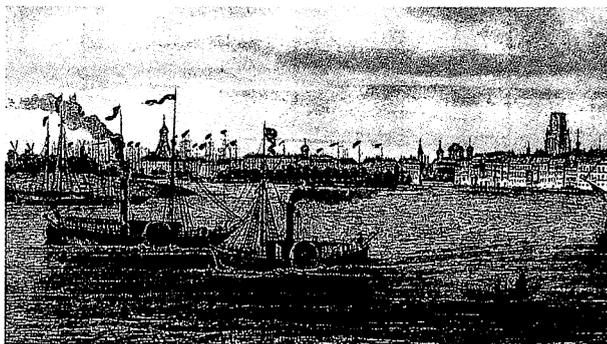
幕生らは、ヨーロッパにおいて進んだ西洋文明を学ぶために、一意専心あたえられたテーマについて研鑽を積むことがじぶんに課せられた使命と感じ、また己れへの勉学のムチとしたのである。

「和蘭行御軍艦方」と呼ばれた取締、内田恒次郎以下十五名(のち長崎で一名脱落した)は、文久二年六月十八日(一八六二・七・一四)の夕刻、咸臨丸に乗船すると、品川沖を抜錨し長崎へむかった。同年九月十一日(一一・二)の午後、カリブス号に乗換えて長崎を出帆したが、十月四日(一一・二五)ガスパル海峡において竜骨を打ち破り座礁した。幕生らは九死に一生をえたのち、バタビアへたどり着いた。十一月三日(一二・二二)の午前、一行はテルナーテ号 Ternate (三本マストの帆船)に乗換えると、バタビアの錨地をあとにし、ヨーロッパへむかった。

途中、薪水をえるためにヘント・ヘレナ島に寄ったが、ロッテルダムの河岸に繋留されたのは、文久三年四月十八日(一八六三・六・四)のことであった。江戸を発って当地に着くまで、じつに三百二十三日も要した長途の



19世紀のロッテルダムの港の風景。
当時の銅板画より。[筆者蔵]



旅であった。

ロッテルダムへ到着。

ロッテルダムは、イギリスのリバプールのマージー (Mersey) 川と同じように、川そのものが港をなしている。当時はまだマース川に架かる鉄橋(「ウイレムス橋」)がない時分であった。

マース川には大小の帆船や蒸気船のマストが林立し、往き来る船も数多みられた。両岸にみられる赤い屋根の建物にまじって、寺院の塔のようなもの、無数の風車やオランダ国旗などが、天に向けて突き出していた。船や家の煙突から立ちのぼる黒いけむりは、空にみなぎっていた。

目敏い市の住民はみたこともない旗に興味をおぼえ、早くも岸壁の上では数百名の見物人がひしめきあっていた。それを大勢の警官が制していた。税関吏が三名やって来て、崎人ヨハン・ヨゼフ・ホフマン博士(一八〇五―七八、オランダ東インド政庁の中国語・日本語翻訳官、レイデン大学教授)と何やら話しをしたのち、幕生らが持参した荷をあらためた。

同日の午後六時半ごろ、待ちに待った上陸のときが訪れた。一同、長い航海中、世話になった船長や乗務員らにいてねいに礼を述べ、かついとまごいを告げた。

別れは哀しいものである。人種や顔つきが違っても、人情は変らない。互に気心を知った仲間であった。

シュルレルという者とホフマンがまず端艇(ボート)に乗り移ったのにつづいて、日本人留学生もそれに乗った。やがて岸壁に横づけになり、一同ロッテルダムに第一歩をしるしたとき、突如大勢の見物人らの間から、「万歳!」とか「日本万歳!」といった歓声が二、三回あがった。



ホフマン教授の写真。
これは海軍大将・谷口尙真の秘蔵のもの。
水田信利著『黎明期の我が海軍と和蘭』（昭和15・5）より。

このときならぬ歓呼の声に、日本人らはびっくりした。

ロッテルダムでの盛大な歓迎で思い出されるのは、竹内下野守ら三十数名の日本使節団がテムズ川を下り、北海を渡り、ヘレフトスライズを経て、ロッテルダムのウィレム岸壁に上陸した文久二年五月十七日（一八六二・六・一四）のときである。

このとき一行は、迎船アルジュノ号から上陸したのだが、おびただしい数の見物人の間から、涌き起った「日本人万歳！ 日本人万歳！」といった歓叫の声を耳にしている。しかも、時節はこの幕府の海軍留学生らが上陸したときとほとんど変わらない。

ロッテルダム市民らは、前年につづいて二度までも日本人をみたわけである。岸壁（場所は不明。おそらくウィレム波止場、ド・ボームピエス、オースター波止場のいずれか）には、ホフマンが手配した四人乗りの二頭曳の馬車が五台、一行を待っていた。

留学生らの身なりは、洋装ならぬ和服である。国を発つときの誓いどおり、お国風を守っていた。

みな一様に黒紋付またはラシヤの羽織に小袖、裁付袴をはき、両刀を腰にさし、チョンマゲをゆっている。足元は当然のことながら草履ばきである。荷物を馬車にのせ、それぞれ分れて馬車にのった。けれど野次馬が多く、警官の手をかりなければ進めそうもない。しかたなく駅舎まで付き添ってもらったことにした。

やがて馬車は、大勢の群集をかき分けながら進んだ。この港町は、運河が縦横に走っている。

そこには帆を下ろした、小さな帆船や小蒸気船の姿もみられる。岸壁にまじって街路樹や建物なども静かな水面に影をおとしている。馬車が市街を通って駅舎に向うとき、沿道はもちろんのこと、建物の窓という窓から、大勢のロッテルダム市民が顔や半身を乗りだして、日本人の一行を

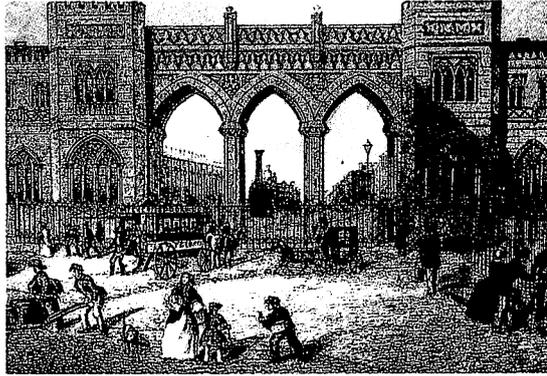
みつめていた。

また主だった建物は、祝意を表すために、日蘭の国旗を十字にして掲げていた。

市民にとって日本人のチョンマゲ姿は、ひじょうに興味を引いたものではない。御医師の林と伊東はもとと坊主頭であった。が、長い航海中、いつの間にか髪がのび、今では散切りである。だからあんまりじろじろ見られることもなく、当地ではすこぶる体裁がよい。

馬車はレウフェハーフェンと呼ばれる運河に沿って北上し、橋をわたり、コールシゲルという通りを経て駅舎にむかった。しかし、一行にとつて初めてのオランダ、だれひとり通過した街の名を知るよしもない。

午後七時半ごろ、広場（デルフトセ・ポールト）に達した。その先にアーチ型のレンガ造りの大きな立派な駅舎がみえた。汽車が構内に入っており、煙突から黒いけむりを黙々として吐きだしている。汽車の利用客もちらほらみえるし、乗合馬車、ハンサム型二輪馬車などがひきりなしに往き来している。



幕生らがはじめて汽車に乗った、1860年代のロッテルダムの「デルフトセ・ポールト」（オランダ鉄道の中央駅）の図。

【筆者蔵】

この駅舎は、「デルフトセ・ポールト」（「デルフトの門」の意）または「セントラル・スタシオン」（「中央駅」の意）と呼ぶらしい。構内には手広い待合室が三カ所、そのそばにコーヒー店があり、ここではちよつとした食事やバターつきのパンなどをコーヒーといっしょに食べられるし、酒なども売っている。

駅舎につくとすぐ、一行はホフマンに導びかれ、オランダ鉄道の一等車に乗り込んだので、ひとまず大勢の野次馬たちにわずらわされることだけは免がれた。最終目的地であるレイデンまでの汽車賃は、二フルデンだという。

午後七時四十分ごろ、汽車はロッテルダムを発し、途中静かな運河に小舟が行きかう、彩色陶器で有名なデルフト、スレーズウェーキ、中央官衛かんがの所在地ハーグ（ス・フラーフェンハーヘ）などで停車したのち、牧草地の風景をみながら同八時半ごろレイデンに到着した。

日本人の一行は、汽車というものを生れてはじめて見、またそれに乗ったのもこれが最初であった。

御軍艦方・赤松大三郎だけは、数年前ペリー提督の献上品の中にあつた汽車の模型を神奈川でみており、また万延元年（一八六〇）咸臨丸に乗り組みサンフランシスコに赴いたとき、カリフォルニア州知事の演説のなかで、数年のうちに北米横断鉄道が完成する、といった話を聴いておどろいたことがあつた。

それまでのかれの頭の中には、汽車についての漠然とした心象イムボウがあつただけで、オランダに着てはじめて汽車をじっさい体験したのである。赤

松にとってはじめての経験なら、西をはじめ他の仲間もおなじである。二本の鉄路のうえを、人間を乗せた箱がうごき、ちゃんと目的地まで運んでくれる、このふしぎなのりもの。その設備の優秀さ、速くて便利なこと、かねて聞きもし、想像していた以上なのにとただただ驚くだけであった。⁽⁴³⁾

学都レイデン。

ロッテルダムからレイデンまで約一時間の汽車の旅であった。当地に着くまで、いくつか大小の町を通過した。町の外に見られたものは、一面草地に家畜が点々と遊んだり、草をはんでいる光景である。

放牧地には、こだちに囲まれた農家、家畜に対して垣根の役目をはたしている小川や運河なども車窓にみた。

ハーグに近く、ライン河の分流に位するオランダ最古の都市レイデンの駅に着いたとき、幕生らは大勢の見物人にとりかこまれ、立ち往生した。幸い警官がいて、やじ馬を押し分けてくれたから、出迎えの馬車に乗れたものの、どこへ行ってもよい見世物であった。

レイデンの駅は、ロッテルダムの駅には規模や宏壮さの点で及ばない。けれどレンガ造りのなかなか立派な建物であった。一行は駅前広場から、馬車に分乗し、スタティオンウェッヒをまっすぐ進んだ。樹木の茂みの上から、大きな風車が顔をのぞかせていた。

やがてライン河の分流に架かる橋をわたり、この市いちばんの目抜き通りであるブレイ街ストリートに入った。特異なオランダ式の屋根と窓をもった建物が、街路の両側にところ狭いばかりに建ち並んでいる。乗合馬車、人馬、通行人が往きかう通りを、日本人をのせた馬車は旅宿へむけて進んで行った。

ここは世界に名だたる大学の所在地だけあって、市全体に何となく落ちつきと文化の香りが感じられる。十六世紀にできたという市役所の壮大な建築を左手にみながらしばらくゆくと、小じんまりとしたホテルの前で馬車は止まった。そのホテルの名は「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」Hotel de Gouden Zon（現在の一五五番地、Scholkelという洋品店）という。一行はここに投宿し、しばらく滞在することになった。

このホテルに着いたのは、午後九時前のことである。小さいながらもブレイ街でただ一つのホテル。

好奇の目を日本人にむける野次馬たちが、表通りからガラス越しにホテルの中をのぞき込んでいる。すでに日は没し、ランプに明りがともされている。おそい夕食がはじまった。そして食事を摂りながら、歓談のひとつときをすごす。めいめい胃をみたと、ほろ酔いきげんで部屋にもどり、柔らかなベッドに身を横たえ、久々に安眠をえた。……



レイデン市の目抜き通り (Breestraat)、正面の建物は市庁舎。

[筆者蔵]



西ら幕生が滞在した「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」(右端の建物) (現在の Breestraat 155番地)。

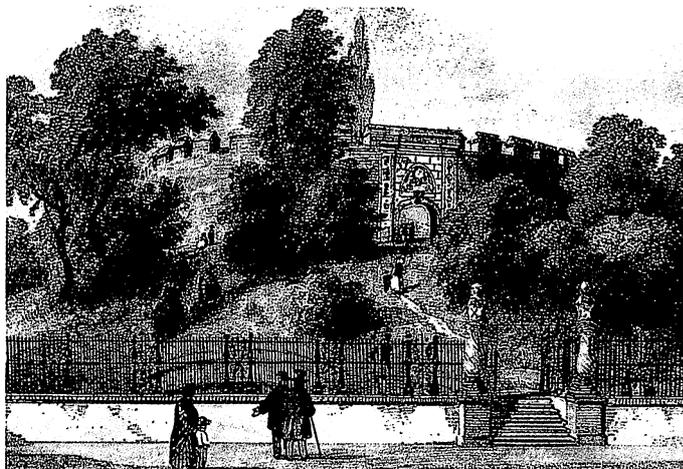
幕府の留学生らが、長い旅路の果てに旅装をといたレイデンは、「シンゲル」と呼ばれる運河にとり囲まれた古い町である。中世このかたずっと眠っているような、静かな町である。時が来ると、教会の鐘が「カーン、カーン」といった澄んだ、美しい音色をひびかせる。それがまた耳にとても快い。ライン河の分流が何本も市の中をゆつくりと流れている。その水はよどみ、みなも水面に睡蓮すいれんが浮いている。疾病に襲われた十四世紀中葉に、ベルギー北西部に住むイ

ーベル人らが来住するようになったときから、レイデンでは、織維産業がさかんとした。一五七三年十月から翌年三月までスペイン軍に攻められたが、この市はその囲みに耐え、市民は勇敢によく戦った。やがてこの市は落せぬと思つたスペイン軍は、包囲をといて退却した。

伝説によれば、オラニエ公ウイレムは、一五七四年レイデン市民の勇敢な行為をたたえ、その功労にむくいるべく、一定期間税を免じるか、大

学を建設するか、どちらか選ぶようにいった。すると市民は大学を設けてほしい、といったという。ウイレムは市民の希望をいれた。一五七五年大学の礎石がすえられ、その後大学の設備・拡充がおこなわれ、高名な学者を招き教育にあたらせ、後年『国際法の祖』と呼ばれるユーゴ・グロティウス(一五八三―一六四五、法学者・政治家)や『医学論』(一七〇八年刊)で有名なヘルマン・ブールハーフェ(一六六八―一七三八、医学者)などの碩学が輩出し、ヨーロッパ屈指の大学のひとつとなった。

また十七世紀から十八世紀にかけて、レイデンから数多の画家が出ているが、最も有名などころではレンブラント(一六〇六―一六六九)がいる。かれは地元の粉屋の息子に生まれ、レイデン大学に入学したが、のち廃学し、ヴェネチア派絵画を学んだ。レイデンで長くくらし、数多くの名画を描いたことはよく知られている。



1880年代当時のレイデンの城を描いた銅版画。

〔筆者蔵〕

市には十四世紀からの古い町並みがよく残されている。並木の多い運河にそって、三層、四層の赤レンガや白亜の家が建ちならび、新旧の両ラインが合流するところに古城アルファがそびえている。

それは低い岡の上に建っている円形の小城（十世紀の創建）である。当時、そこに登ると、遙かカットウエイクの海岸がみえた。ともあれレイデンは歴史と文化のゆたかな町なのである。

レイデンの幕生。

西ら幕生は、レイデンで一夜を明かした。まだオランダに着いたといった実感があまりない。夢やお伽話の世界をさまよっているような気がしたであろう。オランダ式朝食が待っている。

—— コーヒーにパン、そしてソーセージ又はハムに野菜。どれも珍しいものばかりである。一同が朝食をとり、くつろいでいると、十時ごろ例のホフマン博士が、日本学専攻の学生二名をつれてホテルにやってきた。

一人はハーレム出身の学生で、名をド・ブルウクという。もう一人のほうはル・メイトルという学生である。⁽⁴⁴⁾
ホフマンが弟子二人を連れてきたのは、日本人らにレイデン市内を見物させるためである。西たちは、馬車に分乗すると、大・中・小学校、動物園、養育院、博物館、教会、病院、城などを逐次みてまわった。

馬車が石畳のうえを音を立てながら進むと、通行人は足をとめ、日本人にじっと視線をそそぐ。どの目も興味がいんしんとして尽きないようだ。この古い中世以来の市は、その建物の形態・装飾、色彩のどれひとつとっても何ともいえぬ美しさをもっている。独特の切妻と壁をもった家。だいたい色や青みがかかった黒色の屋根の多くは急勾配うまばいをもち、中にはマッチ箱を立てたような正方形、長方形の家があり、ゆるやかな勾配がついている。

窓も一風変わっている。格子こうしを縦・横に組んだ大・小の窓は、白や濃い緑色でぬられていて、こげ茶のレンガ壁や白亜の壁から浮きでている。日本人を乗せた馬車は、どこをどう行ったものかわからない。やがてハーフェル街に至ると、そこにある「市立学校」(小学校)を見、ついでロックホール街の「市立ヒムナジウム」などを訪れた。

それより馬車は、ラーペンブルフの運河沿いにあるレイデン大学の本部を訪れた。赤レンガのこの建物は、もとドミニコ派の尼僧院というだけあって、教会そっくりである。建物のわきに付いている小さな丸屋根まゆぶたの塔が、灰色の空に向かってぬつと突き出ている。

丸屋根の下に時計がいくつか付いていて、一時間ごとに鐘をうつ。また濃い灰青色の屋根には、小さな屋根窓がいくつもついている。屋内を一見したが、議事堂のような大きな部屋には、歴代の有名教授たちの肖像画がかけられており、ひっそりとしていた。ついで建物に付随する植物園(一五八七年創設)の中に入る。

園内には世界中から集められた珍しい植物が植えてある。蘭領東インドやシーボルトが日本から持ち帰って植えた、竹・モミジ・桜などがたくさんみられる。温室もあって、そこにヤシ科の植物が栽培されている。

養育院も、市内にいくつもあった。ホフマンの住居に近いホーフラントセ・ケルクフラフト(中世には運河であったが、のち埋めて街路とした)の「プロテスタント孤児院」、シント・ヤコブスフラフトの「ローマカトリック教会の孤児養育院」、ピーテルスケルクホフの「ワロンの孤児院及び養老院」なども巡覧した。

博物館も市内に二つあり、ブレー街ストラートの「古代博物館」(一八三七年創設、ブレー街十八番地)と「シーボルトの国立日本博物館」を見学した。教会は市内だけでも十五カ所もあるという。そのうちクロックスターヒの「聖ピーテルス大教会」(一三二五年の創建)、ピーテルスケルクフラフトの「ホーフラントセまたは聖パンクラス教会」などを見てもわった。

ついで馬車はフラウエカンブ(現在の国立民俗博物館があるあたり)の「カエシリア病院または市病院」に至ると、そこも一見した。これらの建物を見てまわったのち、さいごに訪れたのは古城である。

これは円形のレンガを積み上げて造った小さな城であり、市のほぼ中央に位置している。銃眼つきの丸い胸壁がぐるりと丘の上を取り囲んでいる。城内には古井戸が一つあるだけの何の変哲もない城だが、その起源は古く十世紀ごろの創建とされている。

一同は馬車をおりると、案内人のあとについて、一六五八年に造られたという門をくぐり、階段をのぼって行った。



日本人掛・ポンペ・ファン・メールドェルト

赤松だけは、日誌にその構造と特徴などを矢立てを取り出すと、しきりにメモし、また写真もした⁽⁴⁵⁾。

馬車による市内見物をおえると、ちょうど昼時になっていた。一同いったん「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」に戻ることにした。

たのしいはずの馬車を駆つての市内見物も、馬車が止まるたびに、数百名の野次馬にとりかこまれじつに閉口した。そんな話がホテルのテーブルについたとき仲間の口からもれた。これではこれからの生活が思いやられる。

やがて昼食のしたくがととのい、一同食べはじめると、まるで阿羅漢^{あらかん}のような外国人がホテルの食堂にぬっと入ってきた。ポンペ医師（一八二九〜一九〇八、もと出島の医官）であった。

かれは医師の林や伊東らとは旧知の間柄だが、幕生の中には初対面のものも少なからずいる。かれは幕生のあとから長崎を発ち帰国の途だったが、一足早くオランダに着き、当時ハーグに住んでいた。ポンペは取締の内田その他に、海相カッテンディーケの命により、「日本人掛」となったことを伝えるにレイデンにやって来たのである⁽⁴⁶⁾。

ポンペは、海軍諸術や万般の学を修めるには、首都のハーグのほうがよい、といった考えをもっていた。一方、ホフマンのほうは、レイデンこそが、日本人の修学にとって最適の場所と考えており、両者の考えは相いれなかった。

ポンペは幕生らといっしょに昼食をとったのち、再訪を約してハーグに帰って行った。

またセント・ヘレナ島以来この日まで、日本人は風呂に入っていないなかったので、ホテルの主人にどこかに湯屋^{バートハイム}はないか、とたずねると、ここから百メートルほど行ったところに「リュトヘルス」という湯屋がある、と教えてくれたので、一同そこへ行って久々にゆっくり体のあかを落すことにした。

「リュトヘルス」というのは風呂屋の主人の名前であり、名をそのまま屋号に用いていたものか。当時、かれは風呂屋の理事をしており、フリーメーソンリー（相互扶助や友愛を目的とする秘密結社）のレイデン支部（「ラ・ヴェルテュー」）の会員でもあった⁽⁴⁷⁾。しかし、幕生らはそんなことは何一つ知っていない。

一同そこに出かけてみて入場料や石けんの高いことにびっくりしてしまう。入湯料は一人一回五十セント、石けんは一個十セントである。



西から幕生が会ったレイデン市長ジーヘンベーク。

当時、日本の銭湯代は、十二文が相場であったから、その高いことに驚いたのもむりはない。各浴室は三人がいっしょに入れるほどの大きさである。部屋の中には、椅子・鏡・マッチなどが備えられていた。肝心な湯船はすべてブリキ製であった。

幕生らは、料金が高いと思いつつも、さっぱりしたい気持が先行し、湯船に体をひたし、石けんで体にこびりついたあかを洗い流さざるをえなかった。日本人がヨーロッパにおいて湯屋に入ったのがこれが最初であった。また気づかなかったが、この日（洋暦六・六）、『ロッテルダム新聞』は、その「国内ニュース」の欄に、日本人のことを小さく取りあげた。

曰く「レイデン——六月五日。教育を受けにわが国にやって来た何人かの日本青年は、まず当地のホテル・ド・ゾンに旅装をといた」。

翌日は、レイデンに来て初めて迎える日曜日である。早朝からホテル前は大勢の野次馬らがひしめきあっており、一步も外へ出られそうもない。昨日といい、今日といい、どうゆうことになるのか、いろいろ思いやられた。午後二時ごろ、ホフマンがやってきた。これからレイデン市長（D・ティプウール・ジーヘンベーク、一八五八〜六六六年まで在任）宅を訪問するという。

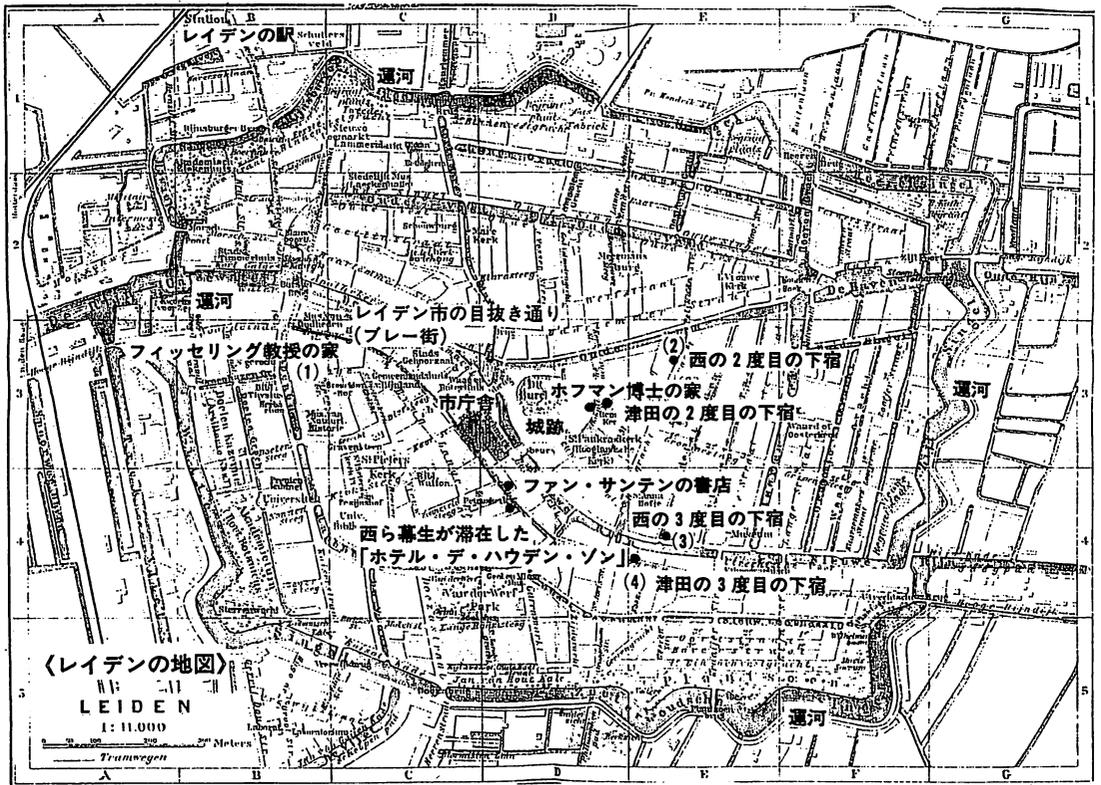
そのため、わざわざ馬車も用意された。ホテルからそこまで歩いてもせいぜい十分ほどの距離なのに、馬車を呼んだのは野次馬たちのせいであろう。

市長宅（現・ブレー街八十五番地、いまは学生アパート）を訪れると、市長のジーヘンベークと妻エリザベット（当時五十歳）らにいていねいに迎えられ、茶菓子などのもてなしをうけた。その折、ヨーロッパ人の接客法の巧みなのに驚くと同時に、日本人の客のあしらい方の稚拙さが思い知らされた。

二十二日（六・八）、午前中、内田は榎本・伊東・林・津田および大川らをともない、ハーグに下宿先の下見に出かけ、午後おそくレイデンにもどって来た。さらに二日後、ポンペはオランダ外相の日本人の學術修業に関する意見書をたずさえて、レイデンに来ると、幕生らと協議した。

ポンペは、ハーグに来なければ、とても十分な修業はできない、といった。そこで一同相談の結果、津田と西と職方五名は、レイデンにとどまり、語学や数学を学ぶことにし、その他のものは二十八日（六・一五）、ハーグへ引き移った。⁽⁴⁸⁾

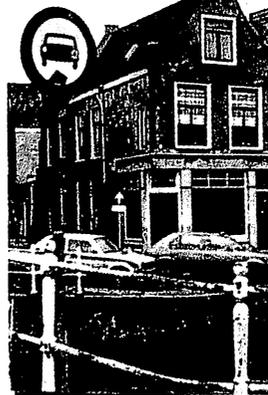
レイデンに残留することになった西と津田、職方五名は、内田ら七名がハーグに移って行ってからも、約一カ月ほどホテル住いをつづけた。や



(3)

(2)

(1)



(1) 西と津田が講義をうけた通ったフィッセリング教授宅（現在の Rapenburg 12番地）。[筆者撮影]

(2) 西の2度目の下宿（現在の Hooigracht 94番地）

(3) 西の3度目の下宿（現在の Nieuwe Rijn 94番地）

(4) 津田の3度目の下宿（現在の Hoogewoerd 125番地）

がてホフマンの世話でめいめい下宿先が決まると、逐次宿を引き払い、オランダ人宅へと移って行った。

津田と西の下宿先は、つぎのようになる。

津田……一八六三年七月ごろ、商人ハルトフ・マウリッツ方に入居（ホフマン宅の向い側、現・ホーフラントセ・ケルクフラフト Hooglandse kerk gracht 四十四番地）。翌一八六四年七月、現・ホーヘールト百二十五番地に転宅。

西……一八六三年七月ごろ、ホテルを引払い、ブレイ街のアウデンドルプ方（不詳）に転宅〔第一回目の下宿〕。のちホーイフラフト Hooigracht 九十四番地に移転〔日付は不明、第二回目の下宿〕。一八六五年、現・ニューウェ・レイン Nieuwe Rijn 九十四番地の仕立屋に移転〔日付は不明、第三回目の下宿〕。

日本人としてはじめて西洋の大学教授から直かに人文科学を教授されたのは、西と津田が最初である。両人が文久三年四月十八日（一八六三・六・四）ロッテルダムに上陸して、慶応元年十月十四日（一八六五・一二・一）レイデンを出発し、帰国の途につくまでオランダに滞在したのは約二年半である。が、かれらが主に滞在した学都レイデンでの生活の実情については、よく分かっていないのである。

なぜなら、兩人に関する扱べき史料がひじょうに乏しい上に、造船学を専攻した赤松大三郎（則良）とはちがって、在蘭中のくわしい日記を残していないからである。ただ救いなのは、赤松日記や西や津田が教えをうけたシモン・フィッセング教授の講義筆記の稿本や兩人がフィッセングおよびその家族とやり取りした手紙が残っており、ありし日の二人の暮らしぶりが、ある程度わかる。

いま年譜的に、西のオランダ時代の主な出来事をたどるとつぎのようになる。

文久三年四月十八日（一八六三・六・四）……ロッテルダムに上陸、汽車でレイデンへむかい、ブレイ街の「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」に投宿。
四月十九日（六・五）……レイデン市内を見物。市内の銭湯に行く。

四月二十一日（六・七）……ホフマン教授の案内でレイデン市長宅を訪問。日曜につきホテルの前、見物人多し。

四月二十七日（六・一三）……内田取締をはじめ海軍班の者、ハーグに転居。西、津田らレイデンにとどまる。のち西と津田、ブレイ街のアウデンドルプ（Oudendorp）宅（不詳）に転居（日付は不明）。

- 五月二十日(七・五)……………日曜日。西と津田、ハーグの赤松の下宿を訪れる。両人はこのころ洋装であった。
- 五月二十七日(七・一二)……………日曜日。赤松、伊東、林、榎本、沢ら五名、レイデンにおもむき、西および職方の下宿を見舞う。
- 六月十八日(八・二二)……………日曜日。赤松、津田および西の下宿を訪れ歓談。
- 七月三〇(九・一二)……………土曜日。赤松、レイデンの諸所を訪れ、夜行でハーグへもどる。
- 八月一日(九・一三)……………日曜日。赤松、津田の下宿を訪れる。
- 八月八日(九・二〇)……………日曜日。日本の十月の陽気となる。赤松、午後からレイデンにおもむき、職方連中に手当金を渡し
 たのち、西や津田と会う。西の案内で赤ランプの遊女屋を試みる。夜九時十九分の汽車でハーグへ
 もどる。
- 九月二十三日(一一・四)……………フィッセルング教授の講義はじまる。
- 十月九日(一一・一九)……………木曜日。赤松、午後レイデンにおもむく。西や津田らと会い、市内を散歩する。
- 十一月三日(一二・四・一・三)……………赤松、レイデンの西と津田の下宿を訪れたが、両人は不在であった。
- 元治元年正月元日(一八六四・二・八)……………「元治元年^{甲子}歳三十六 歳(年のはじめ——引用者)ヲ来丁府(レイデン)ブレードスタラードオウ
 デンドルプ広街老村氏ノ樓上ニ迎フ」「西家譜略」(自叙伝)より。榎本、伊東、林ら津田を招き堅
 モチにて雑煮をふるまう。
- 二月二十日(三・二七)……………日曜日。西と津田、会食。
- 四月五日(五・一〇)……………ケルミスの祭。
- 四月七日(五・一二)……………木曜日。津田、ハーグの榎本方を訪れる。同所で赤松とも会う。
- 五月三十日(七・三三)……………日曜日。赤松、大川の下宿で職方一同に手当金を渡す。西、津田ら同人宅でソバをこちそうになる。
- 慶応元年正月(一八六五・一)……………「歳三十七 歳ヲ来丁府^{オツダレイ}来因河畔裁縫商某の樓上ニ迎フ」「西家譜略」(自叙伝)より。
- 八月二日(一八六五・九・二二)……………鍛冶職・大川喜太郎、アムステルダムでアルコール性肝炎により病死。「腹部は大鼓のごとく張り、
 胸部は紫色に焼けおりたれども……」⁽⁴⁹⁾
- 八月四日(九・二三)……………西と津田、アムステルダムにおもむき会葬する。
- 十月十四日(一二・二)……………西と津田、この日をもって学業をおえレイデンを離れ、帰国の途につく。ハーグの榎本の下宿に一
 同あつまり、酒宴をもよおし、別れを告げる。

十月十五日(二・二)……………西と津田、ベルギーへむかう。レイデンの書籍商ファン・サンテン同行する。
十二月二十九日(二八六五・二・一四)……………西と津田、横浜に帰着。

西の学習計画。

西はオランダへむかうテルナーテ号の船上で、留学生の世話掛に宛てて蘭文書簡をしたため、学習上の希望や計画などを伝えた。西が書いた一書は、まだ誰に師事するかが分らぬ時期に書かれたものであるから、宛名は「関係者各位」となっている。日付もついていない。

ホフマンは、フィッセルিং教授経由で同書簡を一八六三年六月十二日(文久3・4・26、幕生らがオランダに到着して約一週間後)に受取っている。

文面は、海軍局(御軍艦操練所)と駐日オランダ領事デ・ウィットとの間で、オランダにおいて軍艦を一隻建造してもらおう契約を結んだが、日本の海軍将校や蕃書調所からもわれわれ二名が派遣されることになった。近年、日本も外国と外交通商が盛んになったので、ヨーロッパの学術を学ぶための官立の学校(洋書調所)が設立された。

その学校の設備や教授法には欠陥があるといい、「物理学、数学、化学、植物学、地理学、歴史学、——それに四ヶ国語——オランダ語、高地ドイツ語、英語、仏語」などを教授しているが、学生はただそれらを読み理解するに止まっていると記している。

ヨーロッパ列強との交渉や国事や国内の諸施設の改善をおこなうためにも、これからは統計学、法学、経済学、政治学、外交術が必要になるが、これらの学問は日本では未知の分野である、と語っている。

これらすべての学問をわずかに二、三年の滞在で修得することは不可能と考えられるので、「私の意図は、そのためにこれらの学問を逐条的に、順序だてて学ぶのではなくして、簡易なことを習得することであり⁽⁵⁰⁾」といい、要点だけを速修的に学びたいと伝えた。

各科目を一つずつ学ぶことは、今後なされるであろう第二回目の留学生にやらせて欲しい、といい、以上わたしが述べたことを理解された上、良き師を一名選んでいただきたい、といっている。

また時間があれば、フランス語を習いたい、とも述べている。フランス語は、すべての学問に重要な役割をなしているからだとし、われわれ日本人にとって、フランス語を話すことは甚だ困難だといひ、「英語はすでに勉強しましたが、それを話すことはできません。しかし読んだり、理

解したりします」と語っている。

ついで時間があれば、「哲学」の一端でも勉強したいと語っている。「Philosophie^{フィロソフフィイ}とか Wissenschaft^{カウエイズベヘールテ}とかいわれる学問をも学びたいと思えます。この学問は、わが国の法律によって禁じられている宗教思想とは異なり、デカルト、ロック、ヘーゲル、カント等の唱導したものであります」と伝えた。

西にせよ津田にせよ、両人は蕃書調所の教授手伝並であったからオランダ語の読解力はかなりあったものと考えられるが、実力のほどは明らかでない。

いっしょに渡蘭した赤松大三郎は、仲間のオランダ語の学力について若干ふれているが、内田と伊東は、「書物は読めるやうになっていたが、会話は下手であった」と語っている。「その次は榎本、沢、林で多少の素養はあった」といい、だめであったのは最年長の田口で、船中ですこし学んだだけで進歩はなく、はなはだ怪しく、気の毒に思ったと述べている。⁽⁵²⁾

いちばん学力が高かったのは、深川冬木町八幡裏の坪井信良の塾に学び、のち蕃書調所の教授手伝並をつとめた赤松ではなかったかと思われる。かれは坪井塾以来、書物のうえでオランダ語の修業を相当していたので、たいいの用にもさしつかえなかったが、発音だけはよくなかったといっている。赤松は士分の者たちのオランダ語の学力をあまり高く買っていないようだが、内田・沢・榎本・伊東・林らの語学力はそれほど低いものでなかったはずである。

渡蘭後、幕生が日本人世話掛の Hoffman や Ponpe から指摘をうけたのは、オランダ語の発音の悪さであり、それを匡正する必要があった。結局、西と津田の教育を引きうけたのは、レイデン大学のシモン・フィッセルング教授（一八一八―一八八八）であるが、両人が西洋人についてこれまで教わってきた概念や物の考え方に通じず、ましてやオランダ語の、話しことば（会話力や聴解力）に未熟であろう点から、講義をいつでもやめる権利を保留した。

フィッセルングは、西と津田の語学力は十分でないと見てとったので、語学力をつけるために、オランダ語を基本から学ぶ必要を説いた。やがて西と津田は、いつから始めたものか不明だが、小学校の校長で、初等・中等学校用のオランダ語文典を何冊か著した J・A・ファン・ディクから、一週六時間（西の「五科口訣記略による」）、約三カ月間オランダ語の特訓をうけ、ついで一八六三年十一月三日（文久 3・9・22）より、毎週火曜と金曜日の晩、フィッセルング宅（現・ラーペンブルフ Rapenburg 十二番地、現・学生アパート）に通い、個人教授をうけることになっ



若き日の赤松大三郎
(渡蘭後撮影したもの)



フィッセルリング教授の肖像
(レイデン大学蔵)

トに筆記できるほどの語学力はなかったので、フィッセルリングは講義を行なう前に、その草稿を兩人にあらかじめ渡し、下読みさせた。二人はそれを書き写した上で講義にのぞんだものと考えられている。

フィッセルリングは授業計画をたてた。二人に授けるべき学科は、広義の政治学の原理であり、それを二カ年なるべく簡単明瞭に説明するつもりであった。政治学にはつぎの五科があるとし、それを示した。すなわち、

- | | | | | |
|---|---------------|---------------------------|---------|----------------------------|
| 一 | 性法之学 (自然法) | Kenis van Natuurregt | 〔原名〕 | 幕末から明治初年にかけて西、津田らが翻訳刊行したもの |
| | | 〔性法説約〕 | | (西周訳、慶応三年〔一八六七〕刊)。 |
| 二 | 万国公法之学 (国際公法) | Kenis van Volkenregt | 〔性法略〕 | (神田孝平訳、明治四年〔一八七二〕刊)。 |
| | | 〔万国公法〕 | | (西周訳、慶応四年〔一八六六〕刊)。 |
| 三 | 国法之学 (国法学) | Kenis van Staatsregt | 〔泰西国法論〕 | (津田真道訳、慶応四年〔一八六八〕刊)。 |
| 四 | 制産之学 (経済学) | Kenis van Staatshoudkunde | 〔泰西国法論〕 | (津田真道訳、明治四年〔一八七二〕刊)。 |
| 五 | 政表之学 (統計学) | Kenis van Statistiek | 〔表記提綱〕 | (津田真道訳、明治七年〔一八七四〕刊)。 |

などである。

フィッセルリングは、これらの科目の範囲は広いのに、学ぶ時間は短いから大要だけを教え、あとは兩人に後日、書物によってくわしく学習させ

た。

フィッセルリングの講義は、大学の夏期休暇とクリスマス休暇をのぞいて、週二回、夜九時から二時間ほど行なわれた。しかし、津田と西はオランダ語の文語にこそ多少通じていても、師の口述をノー

るつもりであった。

宗教（キリスト教）については扱わないことにした。哲学に類した科目は、含まれていなかった。けれど西も津田も哲学や一般思想にたいする関心は深く、ヨーロッパの哲学界の思潮について学ぶことを怠らなかつた。⁽⁵⁴⁾

フィッセルングは、一八五〇年からヤン・ルドルフ・トルベッケ（一七九八—一八七二、オランダの政治家、一八四年オランダの自由主義新憲法を起草、のち三たび組閣）の後任として、レイデン大学で経済学・統計学・外交史などを講じたのであるが、哲学的にはオーギュスト・コントに私淑していたらしい。

フィッセルングは、西や津田に経済学の講義をしていたとき、社会主義的思想を批判し、両者の興味をそそった。当時、オランダの哲学界はおむねコントの実証哲学の影響下にあり、フィッセルングもその流派に属していた。⁽⁵⁵⁾ 哲学界の代表的学者コルネリス・ウイレム・オブゾーマー（Cornelis Willem Opzoomer（一八二二—一九二二、ユトレヒト大学哲学教授）も、コント学派のひとつであった。

西は『評傳西先生論集 全』（明治13・4）の中で、オブゾーマーについてふれ、「余十年前、利蘭ニ遊ヒシ時、和蘭ニテ其頃有名ノ哲家タルハ、阿伯会米爾氏ナリ 此人ナトモ坤度、丕為拉、彌爾、等ヲ推尊セラレタリト見ユ」（二頁）と語っている。

オブゾーマーは、一八二一年九月二十日ロッテルダムに生まれ、当地のエラスムス・ヒムナジウム（六年制の中等教育機関）を経てレイデン大学に進学し、法律や神学、哲学などをまなび、一八四五年十月博士号を取得した。一八四六年一月、勅命によりユトレヒト大学の哲学教授となり、のち『民法』（三卷、一八四九—五二年刊）をはじめ、多くの著述を著わした。⁽⁵⁶⁾

オブゾーマーは、アーノルド・ゲーリネックス（Gulinx, Arnold' 一六二四—一六九、オランダの哲学者、デカルトの影響をうけた）やスピノザ（一六三二—一七七、オランダの哲学者）の以降のオランダ最大の哲学者らしいが、万有在神論を主張したドイツの哲学者クラウゼ（Krause, Karl Christian Friedrich' 一七八一—一八三二）の影響をうけ、神学研究に従っていたが、ユトレヒト大学で講じるようになってから、コントやジョン・スチュアート・ミル（一八〇三—一七六、イギリスの哲学者、経済学者）などに傾斜して行き、著作や講義によって、この派の哲学を吹き込んだため、国中に広がって行ったという。⁽⁵⁷⁾

ちようど西や津田がオランダにいた時分は、その勢力が学界を風靡していたころであった。西や津田がオランダから持ち帰った哲学関係の書物の中には、オブゾーマーのものがかなり多い。

〔西周助の蔵書〕

De waarheid en hare kenbronnen. 1859.

De weg der wetenschap. 1851.

Staatsrechtelijk onderzoek.

Wetenschap en wijsbegeerte. 1857.

〔津田真一郎の蔵書〕

Het wezen der Dinge. Leyden en Amsterdam, 1848.

Comte, A. Algemeene gronds lagender stellige Wijsbegeerte. S. Gravenhage, 1846.

注・麻生義輝『近世日本哲学史』〔覆刻〕昭和49・5、六四頁より。*は引用者による。

西はフィッセルリングの講義やオブゾーマーの著書を通じて、オランダの実証主義を識り、その立場によって哲学的思索を行なったのである。が、西がオブゾーマーやオーギュスト・コントの存在やその学説を識ったのはいつごろのことであろうか。

幕府の洋学校ともいふべき番書調所（文久二年（一八六二）には「洋書調所」、翌三年には「開成所」に改称）が持っていた哲学関係の洋書のうち、現存するのは十七冊である。この中にオブゾーマーのものとしては『真理とその根源』*De waarheid en hare kenbronnen* 一冊が含まれる。しかし、これは第二版（一八六二年刊）であるから、西は同所に勤務中、目にふれることはなかったはずである。

またオーギュスト・コントの『実証哲学講義』*Cours de philosophie positive*, J. B. Baillière et fils, 1864）は、十二版（一八六四年刊）である。したがって西は渡蘭前、まだオブゾーマーやコントの名を知ってはいなかったと想像される。

森林太郎著「西周伝」の序（明治三十年）には、余（津田真一郎）は、レイデンに住み、レイデン大学のフィッセルリング教授について「欧州政学の要を聞き、余暇互に議論を闘はしたり。但君（西周助）はカント派の哲学を喜び、余は（コント）の実学（実証哲学？——引用者）を好めり」とある。

この文章によると、西周助はオランダ滞在中、カントの哲学に親しみ、一方、津田はオーギュスト・コントの実証主義の信奉者として、フィッ

セリングの講義の余暇に議論を戦わしたことがわかる。

しかしながら、西がカントの哲学を信奉したのは明治十年ごろまでであり、「純粹理性批判」(二七八一年)の著わしたカントではなく、「永久平和論」の執筆者としてのカントであった。⁽⁵⁸⁾

西がコントの哲学概念にふれたのはオランダにおいてであり、「開題門」(オランダ時代の良質のノートに、楷書(漢文)で書き記した哲学入門のような原稿)には、コントやミルへの実証主義思想への傾倒⁽⁵⁹⁾が表れている。が、つぎに引く漢文はひじょうに難解である。

唯至輓近、李士氏非士謨據證確実、弁論明哲、将有大補乎後学。是我亞細亞之所未見。而塊悟支・坤度実首唱之。蓋取理於胸臆、無有堤際。雖論大而語詳、所裨幾可。弁駁相繼、支吾互發、所謂斐爾蘇比之学亞那爾幾非邪。⁽⁶⁰⁾

唯、輓近(このごろ)——引用者)に至って、李士氏非士謨(positivism 実証哲学)は據證確実、弁論明哲なれば(道理がはっきりしている、意か)、將に大いに後学に補すること(自分にとつて役立つこと)あらん。是れわが亞細亞の未だ見ざる所なり。而して塊悟支・坤度実首唱之(となくえる)。

蓋し理を胸臆(心の中)より取りて、堤際有ること無し。論は大にして語は詳しく、裨する所幾んど可なり。弁駁相繼、支吾(行き違い)互いに發し、所謂斐爾蘇比(哲学)の学、亞那爾幾(無秩序、混乱)は非なるか。

慶応元年十月十四日(一八六五・一二・一)の午後、西と津田はレイデンを出發し、帰国の途についた。当日は見送りの同胞らとロッテルダムで一泊し、翌十五日はブリュッセルに至った。当地までレイデンの書籍商ファン・サンテンが多年の友情から兩人に同行したが、ここで双方別れをつげた。

それより二人はパリに出ると、しばらく都見物をして遊んだが、この間に森有礼、福地源一郎らと交遊した。ついでマルセイユに至り、そこからフランス郵船でアレキサンドリアに出、さらに陸路スエズに出ると、ふたたび船に乗り、香港、上海を経て、同年十二月二十八日(一八六六・二・一三)横浜に安着した。そしてその夜のうちに江戸に入った(「五科口訣記略」)。

翌慶応二年三月、前職を引きついで開成所(蕃書調所の後身)の教授手伝となり、かたわらフィッセルングの講義録「万国公法之学」(国際法)

の翻訳に従事し、同年末これを訳了した。同三年二月、奥詰となり京都におもむくと、公務のかたわら私塾（名称は不詳、徳川昭武に随った木村宗三のあとを引きうけたもの）を営んだ。

明治元年（一八六八）、時に四十歳。沼津兵学校頭取となり、城内に住んだ。翌年十一月、周助を改め、はじめあまよと称した。明治三年、徴されて上京すると、兵部省に出仕、学制取調掛となり、同年十月に浅草鳥越三筋町に居をすえ、自宅からすこし離れた所に借家をかりて私塾（育英舎）を開き、翌四年、神田小川町広小路角の屋敷に移転すると、英・数・国漢を教えた。

『新聞雑誌 五』（明治4・6）にみられる「都下の私塾一覽」に、

洋学 西周助 生徒
十三名

とある。明治五年（一八七二）陸軍大丞に任じられ、同七年には「明六社」（明治六年森有礼を中心につくられた思想団体の一つ）の会員になった。

明治九年（一八七六）宮内省御用掛、翌年『利学』（ジョン・スチュアート・ミルの *Utilitarianism* 功利主義の訳）を刊行。明治十一年参謀本部出仕。明治十二年（一八七九）一月、東京学士会院が設立されると、津田真道とともにその会員に選ばれ、のち会長となる（『東京日々』明治12・1・29）。明治十三年参謀本部御用掛（准委任官、月給三五〇円）となり、京橋区三十間堀に移転した（『東京日々』明治14・1・4）。

明治十四年、五十三歳。文部省御用掛兼東京師範学校校長。『兵語字書』なる。翌年、元老院議員に任ぜられる。明治十六年、「独逸協会学校」の校長となる。明治十七年（一八八四）一月、学習院において「哲学会」（東京大学の教員および哲学者らが中心となって作った団体）の発会式が行なわれた。西もその会員となった（『郵便報知』明治17・1・28）。

この年の十二月、津田真道とともに「日本節酒会」の会員となった（『東京日々』明治17・12・26）。

明治二十三年（一八九〇）貴族院議員に勅選。明治三十年（一八九七）一月、男爵を授けられた。二月一日中風により大磯の別荘で死去。享年六十九歳であった（『国民』明治30・2・4）。

西周と社会学

西周はオランダ留学中にヨーロッパの社会科学、とりわけコントの実証哲学の洗礼を受け、帰国後その移植者として知られた。西は、主として

英書を通じて学んだコント社会学の片鱗を、文明開化期の日本文化に移植したのであるが、かれほどの程度それに通じていたのであろうか。またかれが紹介したものは、どのようなものであったのであろうか。

論点をこの二点にしぼり、これらの問題について論じてみたい。

幕末期、西はコントの学説について人に何も語らず、また何も記していない。が、明治維新後、稿本（下書き）用にいろいろメモを取り、また私塾での講義の中でそれに言及している。西がはじめてオーギュスト・コントの存在を知り、その学問体系についてははじめて筆を取ったのはオランダに留学中のことと考えられている。

西の「開題門」（短文による小品、前半は中国の儒学と西洋哲学の沿革を略述し、後半は学問体系論、すべて難解な漢字で書かれている）は、オランダ時代の思索⁽⁶³⁾であると推定されている。

小品（一）のしょっぱなに「斐爾蘇比」（フイロソビ）の語が出てくる。そのあと実証哲学、実証主義のことばやオーギュスト・コントの名が出てくる。が、コントに言及したのは、これが最初であらう。

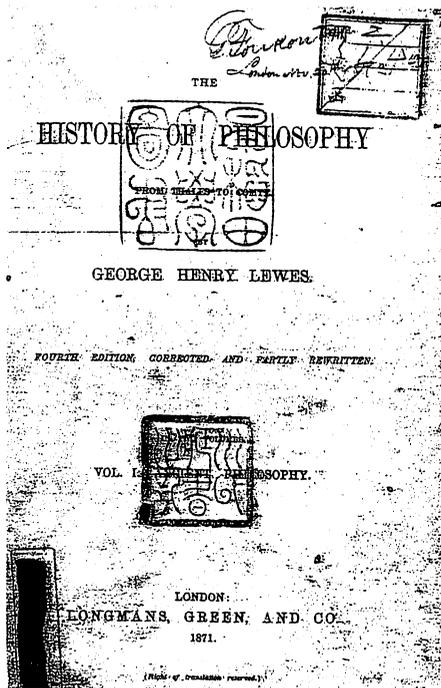
さらに小品（四）の中に、「會士乎魯義」（ソシオロギ）（社会学）の語がはじめて姿をみせるが、西は sociology を音訳している。

又名役知古是也、後論治人之要、日政原素理知幾是也、又名會士乎魯義、此二編取源於前四篇、以開理利之宗、（後略）⁽⁶⁴⁾

又役知古（ethics 倫理）と名づくる是れなり。後、人を治めるの要を論じ、政原素理知幾（politics 政治学）と曰ふ是れなり。又會士乎魯義（sociology 社会学）と名づく。此の二編は源を前四篇から取り、以って理利の宗ヲ開く……

これらの記事は、公刊の目的をもち、私記としてしまい込んでいたものである。しかし、明治三年（一八七〇）十一月上旬、浅草鳥越町前町にある万屋の持物である長屋で私塾（育英舎）⁽⁶⁵⁾を開くや、「百学連環」（子供を輪の中に入れて教育する）の意。ヨーロッパの高度な学問の概論）について講義を開始した。

西は講義の中で、コントとその三段階説、実証哲学などについて言及している。



西周がコントの三段階説を説くとき利用した
ジョージ・ヘンリー・ルイス著『列伝哲学史』
(第3版より)。

[早稲田大学中央図書館蔵]

(西先生口授第二編第二号 百学連環 第一編稿中なかみの饒香)

また「百学連環覚書」(第一冊)⁽⁶⁸⁾の中にコントの名が出てくる。

August Comte + 1795 - 1857

empirical classification of facts

体系上

類別

手実

Cours de philosophie positive

実理上哲学

新説

drie stage

場合

西の「五原新範」は、明治四、五年(一八七一、七二)ごろ、講義用に書かれたものであるが、これはコントの科学分類法によった、天文学・物理学・化学・生物学・社会学(人間学)の五科を、百学の基本的学科と考え、原学、五原、五学などと呼んだ。⁽⁶⁹⁾

「生性発蘊」^(はつうん)は、明治四年前後の起稿⁽⁷⁰⁾と考えられ、哲学の性質、西洋哲学史を概説し、さいごにコント哲学を土台として、じぶんの学問体系を明らかにしたものである。全編コント哲学の解説でもある。

この中で西は、コントの小伝、その実験上の理論、三段階説、生命論、社会学(人間学)、などについて論じている。

コントの伝記については、つぎのようにある。

名ハ塊胡斯、姓ハ坤度(十紀後一七九五〜一八五七)、仏ノ

厄羅爾德州蒙德不利爾ノ人、歳十九（二八一四）巴里ノ百術学校ニ入り、後其校の復習人ニ補シ、尋テ入学試業ノ、官僚ニ補ス（任じられる——引用者）、歳四十九（二八四四）同僚ト議合ハスシテ官ヲ罷ム、初メ通生学派ノ巨臂（大きな力のある人）聖西門方サニ新学ヲ唱ヘ名アリ、坤度聞テ之ヲ悦ヒ贊（礼物）執テ其門に入り、高足（すぐれた）弟子タリ

後西門死ス（二八二五）、坤度歳三十、方サニ已レカ説ヲ立テ、新タニ学問ヲ創セムト謀レリ、著ハス所クウル・ド・ワイロソフイー・ポシチーウ訳シテ実理哲学史ト云フ（一八三九ヨリ次年マテ）カテシズム・ポシチキスト、訳シテ実理問答（二八五〇）、ポリチック・ポシチキスト実理政学（一八五ヨリ一八五四マテ）アリ、

其晩年著書中、説教門ノ事ニ及ハサルヲ悔イ、著ハシテ、ラ・オレリジオン・ド・リュマニテイ人道教門ノ書アリ、将ニ新タニ教法ヲ建ムト謀レリ、此最後ノ策、世蓋其過失ノ大イナルヲ尤ムル者ナリ、

坤度ノ学自ラ号シテ、ポシチキズムト謂フ、以テ超物理物質ノ諸流派ニ別ツ、ポシチーウハ、定実確等ノ意爰に実理学ト訳ス⁽⁷²⁾

また実験上の理論、生命論、三段階説については、つぎのように述べている。

○今余カ従フ所ノ方法ハ、坤度美爾ニ頼ルト雖も、実験上ノ性理ヲ講スルニ、其源ヲ起セル^{こと}ハ、猶古クヨリ然ル^{こと}ニテ、既ニ観念伴生ノ説ハ、様可ノ發明ニ属セルヲ……^{ロツク}

とある。

統一ノ観ハ即チ哲学ナリ

是レ坤度氏ノ、一大鼎革（大革命の意）カ——引用者ヲ起スノ要旨ナリ、而メ尚之ニ加ヘテ、其創立セル三条ノ要訣アリ、是レ此学ノ条理ヲ、始ムル者ニ係ハリテ、其二ハ、入門ノ方法ニシテ、其一ハ、此学ノ史伝来由ナリ（後略）

其第一ハ、哲学ノ要訣ニシテ（中略）其第二ハ、類別次序ノ要訣ナリ（中略）

数⁽⁷³⁾ 学ハ星ノ学ノ階梯トナリ、格物学、化学ハ、生態学ノ門戸トナリ、而メ生態学ハ、人間学ノ廊廡(長い建物)トナルカ如シ

バイオロジ、希脳ピオス、生ロゴス論ノ義、是坤度ノ創立ニ係ハリ、尋常⁽⁷⁴⁾此語ヲ用フル意ニ非ス、(中略)

是亦坤度ノ創意、ソサイテノ語ヨリ变成スル者、人間相生養ノ道ヲ論シ、其中ニ政事法律教法等ノ科ヲ兼スル哲学ナリ

また西が人間学と呼ぶところの社会学については、つぎのようである。

有機生體ノ理学モ、同シク別テ、生態学、井⁽⁷⁵⁾ニ人間学トス、人間ニ係⁽⁷⁶⁾ハル見象ハ、一人ノ人ニ係⁽⁷⁷⁾ハル見象ヨリモ、組織セルヲ著シ、故ニ、人間学ハ、生體学ニ繼クヘシ(後略)

又最後ノ人間学ハ、其見象極メテ特別、極メテ組織ナルモノニシテ、万象(万物——引用者)中ノ、至近至実ナル者ナレハ、人ニ在テ、極メテ切要タリ(きわめて重要である)(後略)

坤度モ、(中略)有機性體ノニ学、即チ、生態学、人間学ニ至リテハ、名ヲサヘニ、新タニ命シタル者ニテ、未⁽⁷⁸⁾タスル学問ノ、世ニ立タサル者ナレハ、之ヲ立ルノ、一大難事タルハ、言ハスシテ知ルヘシ、是レ坤度モ其ノ人間学ノ一要素タル、新教門(新しい学派)ヲ創立セムトシテ、自⁽⁷⁹⁾ラ過⁽⁸⁰⁾テル所ナリ(後略)

小論「尚白劄記」は、明治五年(一八七二)ごろの起稿と考えられている。この中で西は、五学(天文、物理、化学、生物学、社会学)の模著を発表したコントの名を掲げ、ついで現象の単純複合と理法(法則)の基準について述べている。

埃居斯多・坤度嘗て五学の模範を著はし、天上理学(天文学)、地上理学(格物学、化学)、生體学(バイオロジ)、社会学(ソシオロジ)と為す、是現象の尤概通単純なる者より尤特別組織せる者まで、其理法の度に準して定めたる者なれば、近世の諸名家も亦之を取れりと見ゆ、(後略)

「生性発蘊」(明治四年前後の起稿)において、西は英語の sociology を「人間学」と訳したが、「尚白劄記」の中では、こんにちわれわれがつうに用いている「社会学」といった風に訳している点に注目せねばならない。明治初年ごろ、西の訳語は一定せず、いろいろ使いわけている。

「人性三宝説 一」は、明治八年(一八七五)六月に、『明六雜誌』(第二十八号)に発表した小品だが、moral philosophy(道徳学、倫理学)について語ったものである。三宝とは、西によれば健康、知識、富有のことであり、社会生活の基をなすものであるという。かれは、道徳論において、この三つを宝としている。つまり道徳の大本だといっているのである。

欧州哲学上道徳ノ論ハ古昔(むかし)ヨリ種々ノ変化ヲ歴テ今日ニ至リ、終始同一轍ニ帰スル」莫シ、中ニモ曩時ノ説(中略)猶盛ンニ行ハル、
「ト見エタリ、然レドモカノ実理学」アイロンファイモラル「仏ノ塊及期多坤度」ボシチヒスム起リテヨリ 頗ル世間ノ耳目ヲ一新シタルト見ユ(後略)
アウグストコント

西の社会学は、コントの原書によって学習したのではなく、イギリスのジョージ・ヘンリー・ルイスやジョン・スチュアート・ミルらの著述によって学んだものである。たしかに西は、日本にコント社会学を伝えた第一号であったことはたしかである。が、その紹介は組織的なものではなかった。

西の社会学の展開は、あくまでこま切れであり、体系立ったものは見られない。コント社会学の移植者としての西の貢献についてあえていえば、三段解説や学問体系論について紹述したことであろうか。

西はコントのような独創的な体系家ではなく、百学敬蒙家であった。大観すると、西は社会生活について一般理論の展開を試みず、ましてや社会の歴史的研究も行なわなかった。かれの念頭にあった中心的な考えは、明治という社会の革新期にあたって、哲学的敬蒙活動を盛んにすることであったのであろう。

明治十年代のスペンサー社会学の受容に先立つこと数年あるいは十年前に、西によって実証主義哲学が維新後の日本社会に、コントの革命後の社会再建や改造の理論として伝わったことは、わが国の社会学史上看過してはならぬ点である。

西のコントについての研究の多くは断片的なものであり、公刊の目的をもたず、講義の中で塾生に語ったものとか、秘蔵底にしまいこんでいた

ものである。本邦においてオーギュスト・コントの名とその学説が、はじめて紙上に現われ、紹介されたのは明治十年代であった。コントの名が現われ、簡単ながらその学説の一端が最初に紹介されたのは、トンプソン氏著『交際論 初編一』（丸家善七、明治11・10）においてであった。

コムトノ曰ク学問ノ真味ハ 前言ノ力ニアリト 故ニ其前言ス可ラザル者ハ 之ヲ学問ト云フ可ラス 例令ヘハ舍密学ノ如ク 何ニテモ二ツノ元素或ハ其混合物ノ親和ニ依テ 何々ノ混合物ヲ生ス可シト 前言スルヲ得ルガ故ニ 之ヲ舍密ノ学問トコソハ云フリ 然ルニ人間ノ如キハ 其前言ス可ラザル意ト感覺トノ自動力ヲ有スル活動ナレハ 決シテ一ノ原法ニ由テ支配サレ可キ者ニ非ルナリト

（前掲書、「交際論ノ説明並歴史」二頁）

ついでコントの学説がさらに具体的に紹介されたのは、

チャンパー原著
塚本周造訳

『論理学

全』（文部省印行、明治11・11）であつた。

オーグスト、コント氏始テ學術ニコノ二大區別ヲ建テ 而シテ所謂拔類学科ヲ分画シタルコト至テ蔽明ナリキ 其説ニ由レハ 則算学、星学、理学、化学、生活学、交際学（社会学のこと）ハ拔類学科ニシテ 六種ノ根元（事のおおもと）タル性質及ヒ功用ニ適合ス 其レ算数ハ数、量、度ヲ説キ 星学ハ中心ニ偏向スルコトヲ論シ 物理学ハ凝聚シテ形ヲ成セル物体ヲ論シ 化学ハ同シカラサル物質ノ親和（よく化合する）ヲ論シ 生活学ハ動物ノ生活スル所以ヲ論シ 交際学ハ人生交際ノ設立ヲ論スル者ト定メタリ

○斯ク学科ノ次序ヲ立テタルモ 同氏ノ説ニ依レハ是ヲ自然至当ノ次序トナシ 是等ノ學術始テ発明セラレシ順序モ 亦此ノ如シトナシ 此数者ヲ学フニモ 亦此ノ序ニ從テ 漸々ニ進メハ 則チ其理ヲ了解シ得ルコト至テ易シトイフ（同書、九十二頁）

交際学ハ人間社会ノ理（道理、すじ道）ヲ講ズルノ学ニシテ 其論スル所ノ発象多端ニシテ 前二位スル五大学科ノ理 悉ク存セザル無ケレハ 則之ヲ末位ニ置ケリ 夫レ人世交際ノ情態ハ 無機体有機体ノ性質ト万物ノ靈タル人心ノ性質トニ基キテ成ル

而シテ人及ビ社会ノ生命 皆是ノ学科ニ論スル所ノ理ヲ離ル、能ハズ 是ノ利ヲ益々能ク証明シ得ルトキニ 生命モ亦益完好（すべて備わつてりつばなこと）ナルヲ得ベシ

人間ノ交態（交際のやり方）ハ 人心天然ノ性質ニ依頼スルコト更ニ近密（きわめて親しい）ナルカ故ニ 他の諸学ノ尚未夕明ナラサリシ時代ヨリ 世人既ニ人心ノ理法（人の心の筋道）ト共ニ 交際ヲ其浅短ノ思想ニ由リテ講究セリ

然レドモコント氏曰ク 他ノ諸学開明ニ進メハ 交際学モ亦然ラサルナキコトノ証左史冊(史書) 上ニ歴々(あきらか)タリト、交際学ハ平和進歩ノ
両語アリテ 各其意ヲ異ニスルコト 猶器械学ニ動静ニ別アリ
生活学ニ生活成長ノ両力アリテ 之ヲ論別スルガコトシ平和トハ 交際ノ 情態(ありさま) 変易スルコトナク 依然トシテ 平和ナルヲ謂ヒ 進
歩トハ 交際ノ情態変易シテ 更ニ善ニ進ミ 例バ奴隸ヨリ自由ニ進ムガ如キヲ謂フナリ 蓋此ノ二者ヲ判然論別スルヲ得ハ 交際ヲ知り歴史ヲ觀ル
ニ大ナル裨益アルベシ(後略)

(一一四—一一六頁)

同書の中で、塚本が sociology のことを「交際学」と訳している点にわれわれは注目すべきである。「生活学」という語もみられるが、これも社会学の意で使っているのだろう。

また「人間社会」とか「社会ノ生命」といった風に、*社会* の語がみられるが、既述のように英語の society を「社会」と訳したのは明治十
年前後のことである。

第三章 明治期の日本社会学

ハーバート・スペンサー思想の受容。

十五代將軍慶喜が大政奉還したことで、幕府は事実上倒れ、わが国は、天皇を中心とする君主政体に戻したのであるが、日本社会は明治十一、
二年(一八七八、九年)ごろまで混沌としていた。その間、社会にもっとも勢力があったのは欧化主義⁽⁸²⁾であった。維新以後、朝野をあげて一切の
文物を西洋化することに没頭した。

明治七年(一八七四)に端を発し、同十三、四年(一八八〇、八一)にピークに達した藩閥専制政治に反対して自由に政治に参与する運動――
自由民権運動を、時の政府は国民運動であることを否定し⁽⁸³⁾、外国の思想にかぶれた不平士族や愚民らの煽動とみていた。

たしかに外国思想のうちでも、ルソーやモンテスキューのフランス思想と並んで、ベントム、ミル、スペンサーのイギリス思想は、明治初年の
わが国の政治思想に大きな影響をあたえた。自由民権論者も、その学説や思想をよりどころとして利用した。

西は既述のごとく、オーギュスト・コントの紹介者として、またその所論において、近世日本の社会学の創始者であったといっても過言ではない。コントがわが国に及ぼした影響はそれほど大きくはなかったが、維新後の日本に、逸早くその学説や思想が組織的に紹介され、かつ重大な影響をあたえたのは、ハーバート・スペンサー（一八二〇—一九〇三、イギリスの哲学者・社会学者）であった。

西はコントについてスペンサーについて、「学問ハ淵源ヲ深クスルニ存ルノ論」と題して、明治十年（一八七七）東京大学において講演を行っている（のち講演内容は『学芸志林』第一巻に発表された）。

余近日スベンセル氏ノ性理書（哲学書）ヲ読ミ感スル所アリ 今論題ヲ論述スルニ方リ 聊カ基本本文ノ大意ヲ訳シ 次ニ余力論述ニ及フヘシ（一頁）

注・（一）内は引用者による。

と語ったのち、スペンサーの『心理学原理』（*Principle of Psychology*, 第一巻）に言及した。ついで同書の内容にふれ、所感を述べている。

西がはじめてスペンサーの名にふれたのは「生性発蘊」においてであり、「是レ皆、細胞増加ノ一理ニ本ツキ、唯時処ノ景況ニ因テ、変化スル者ナリ、余吾カ友非巴多、士斑節ノ發明ニ依テ、他日此論ニ及フヘシ」と語っている。⁽⁸⁴⁾

西は明治初年ごろ、スペンサーの著述に親しんでいたことがわかる。

スペンサーの著書は、ジョン・スチュアート・ミルのものと同じく、維新後ほどなくわが国に輸入されたものと思われる。スペンサーの著述として、本邦において一番早く翻訳紹介されたものは、*Social Statics: or The Conditions essential to Human Happiness specified, and the first of them developed*, John Chapman, London, 1850, 略して *Social Statics* と云ふのである。

こゝんにち *Social Statics* は、ふつう「社会静学」と訳すが、明治前半期においては、抄訳して、

『権利提綱』（尾崎行雄訳、明治十年）

『社会平権論』（松島剛訳、明治十七年）

『風俗習慣改良論』（城泉太郎訳、刊行年不詳）



尾崎行雄訳『権理提綱』(天・地) (明治11・3刊)
[法政大学図書館蔵]

と名づけられて訳された。

このうち最後の『風俗習慣改良論』は、版元に原稿を渡し、出版を托したようだが、果して出版されたかどうか疑わしいという⁸⁵⁾。

スペインサーの名が本邦において最も早く紙上において紹介されたのは、尾崎行雄(一八五九—一九五四、明治・大正・昭和期の政党政治家)が訳した『権理提綱』^{同種本論 男女同権論 父子同権論} 天(明治10・12)であろう。

訳者による序文(漢文)の中に、「此書也抄訳於英國碩学斯威士蘭氏著宗西留斯太的中者、氏以紀元一千八百十年生於旬留比幼而志学始受父母膝下之教育後就叔父東馬西斯辺鎮氏の著『西留斯太的』^{ソイシャルステティック}か)知氏賦性多痴静坐読書之有害也……」(此の書は、英國の碩学ス威士ンサー^{セマック・スンサー}の著『西留斯太的』^{ソイシャルステティック}父母膝下の教育を受け、後、叔父の東馬西斯辺鎮^{トマス・スペンサー}に就いて学ぶ。其の父、氏が賦性^{ふせい}(天から与えられた性質)疾多^{やまひ}ければ、静座して書を読むに、これ害有るを知るなり……)とある。

『権理提綱』は、「天」と「地」の二冊本から成るが、五年後の明治十五年(一八八二)六月には、再版(『改訂権理提綱 全』)が出た。このとき尾崎はふたたび「序文」を書いた。同書の再版を求める書肆の声が高く、加筆訂正ののち再刊したと述べている。

権理提綱再版序

権理自由ノ説ハ 人皆ナ之ヲ唱フ 然レドモ如何ナル者 是レ権理ニシテ 如何ナル者 是レ自由ナルヤニ至テハ 世間之ヲ知サル者多シ 之ヲ知サル尚ホ可也

僅ニ其堂ニ昇テ 未タ其室ニ入ラス 妄ニ之ヲ臆断シテ 自ラ誤リ併セテ人ヲ誤ル者アリ 是レ戒メスンハアル可ラサル也 且ツ夫レ権理ト云ヒ 自由ト云フ 其言極テ簡ナルモ 其義甚タ広シ 学士論客ト雖トモ 尚ホ惑フ所ナキ能ハス

余嚮キニ（以前）英ノ碩学スベンサー著「ソーシャル、スタチックス」ヲ読ンテ 其立論（議論）行文（作つた文章）共ニ 他ノ腐儒（くだらない学者）輩ノ説ク所ト 殊差天淵ナルヲ（雲泥の差）覚フ
 即チ其権理ヲ論スル者 十有余篇ヲ抄訳シ 題シテ権理提綱ト云フ 爾来（それ以来）五星霜（五カ年）ヲ経過シ 余モ亦去テ四方ニ流寓ス（他国にさすらい住む） 去歳（昨年）ノ秋 余ノ再ヒ東都（東京）ニ留ムルヤ
 書賈（書店）ノ来テ再版ヲ促ス者少ナカラスト雖トモ 箱中既ニ稿本ヲ止メス 嚮ニ印行スル所ノ者（以前に刊行した本）復タ一部得ル能ハス
 再訳ノ勞ヲ経スンハ 何ヲ以テカ書賈ノ求メニ応スルヲ得ン 荏苒幾ント一年ノ後チ（ぐずぐず一カ年たって）丸善^{不明}書房ノ人 終ニ一部ヲ探リ得
 来テ 訂正ヲ請フ 則チ加除添削（文章の語句を削つたり修飾したりする）シテ 其求メニ応ス
 世人之ヲ読ンテ室ニ入ルノ門庭ト為サハ 盖シ余力期スル所ニ背カス

明治十五年夏夜

尾崎行雄識

『改訂 権理提綱 全』は、明治十年に同タイトルで出版した同書の「天」と「地」のすべてを収録し、さらに生命ならびに自由、貿易、自由演説、土地使用、財産所有などの権理などを新たに訳出し、一冊にまとめたものである。

序文の中に、「権理」とあるのはスベンサーがいうところの political rights（政治的権利）を訳したものであり、また「自由」は Liberty の訳である。この「権利」も「自由」も、当時の日本社会において、人口に膾炙されたものであろう。⁽⁸⁶⁾

スベンサーの著作物の多くは、明治前半期において盛んに紹介され、各方面に影響をあたえたのであるが、中でもいちばん多く訳され読まれたのは、鈴木義宗訳『代議政体論』（丸善商社書店、明治11・10）であった。

スベンサーが一八五〇年（嘉永三年）に *Social Statics* を自費でもって初版七五〇部出版したとき、まだ無名であったせいも、本の売れ行きはわるく完売するのに十四年以上もかかった。⁽⁸⁷⁾ が、日本では皮肉にも爆発的に売れ、スベンサーの名声は大いに上ったのである。

『社会平権論』の訳者・松島剛⁽⁸⁵⁾（一八五四〜一九四〇、享年八十七歳）は、もと紀州藩士である。元の名は辰三郎利通⁽⁸⁶⁾といい、明治六年に剛に改めた。七、八歳のころより藩儒について漢学をまなんだのち、十二、三歳で蕃書調所で『法朗西文典』や『仏語明要』をたよりとして、二年ほどフランス語を学習した。⁽⁸⁸⁾ 明治七年（一八七四）ごろ、大坂の河口居留地において、聖書クラスを主宰する聖書クラスで、ウィリアムという外国人



松島剛訳『社会平等論 完』(明治23・2)

行した。かくして明治十四年(一八八二)五月に第一巻、同年六月第二巻、明治十七年(一八八四)二月に第六巻が刊行された。版元の経営者は大野堯運(僧侶)であり、発行所は報告社である。⁸⁹⁾

わたしが見たものは第三版『社会平等論 完』(東京 自由閣書店、明治23・2)である。同書の序文につきのようにある。

社会平等論卷一再版緒言

我輩ノ此書ヲ訳スルヤ 専ラ通俗(だれにもわかりやすい)ヲ旨トシ 行文ノ平易ヲ務メタレトモ 奈何セン原書ノ意味 深遠高妙且吾輩ノ浅学努材 殊ニ文字ニ嫻ハス行文暗澹ナル(あいまい)故ニ 読者ヲシテ通会(理解)ニ苦マシム者蓋シ多カラン(中略)

本書ノ著者斯道瑣氏ノ主義ニ於テハ

最大幸福ヲ以テ 造化(天地万物をうみだす)ノ目的 即チ天カ人類ヲ造リシ目的ト視做スト雖トモ 之ヲ以テ直ニ行爲ノ正邪善悪ヲ測算スベキ規矩(物さし)トハナサスシテ 同等自由ノ法則(卷ニ詳カナリ)ヲ以テ 之カ規矩トナセリ

詳ニ之ヲ言ヘハ 同等自由ノ法則ヲ遵奉シテ 毫モ之ニ悖ラサレハ 必ラス最大幸福ヲ得ラルベシト云フニアリ(後略)

訳者識

について英語の手ほどきをうけ、ついで堺市の河泉学校(英学校)、慶応義塾で英学を勉強した。西南戦争(明治十年)前後のころのことであり、当時慶応義塾の生徒のあいだで聖書の研究が盛んであった。

やがて松島は日曜日ごとに、築地居留地にある長老教会のタムリンのもとに通うようになった。もともと儒教思想に何となく不満を感じていたが、だんだん西洋哲学のほうに関心が向いて行った。このときスペンサーの *Social Statics* と出会い、同書の中において、*justice* (正義) とか *benevolence* (慈悲心、博愛心) などが説かれていることに大いに感動し、訳筆をとり三分の一ほど訳したとき、友人の勧めにより、『社会平等論』(原書は一八六四年刊のアメリカ版 *Social Statics*) と題し、六冊に分けて刊

明治十四年九月

なお、この第三版には訳者による「斯(ス) 氏小伝」が付いている。

明治十四年（一八八二）といえば、この年の三月参議大隈重信は国会開設意見書を提出したが、十月には伊藤博文らのクーデターが敢行され、参議を罷面されている（明治十四年の政変）。この年、自由民権と国会開設論が盛んなときであったから、本書はひじょうな歓迎をうけた。何よりも「平権ひらけん」の二字は民衆の心に感銘をあたえたものらしい。

そのため版元には諸方から注文が殺到し、土佐の立志社（明治七年に板垣退助ら民権論者が高知県に設立した政治結社、明治十六年海南自由党と改称）などは、電報にて何十、何百とまとめて注文した。版元の報告堂はあまりの売れ行きに勢いづき、訳者に次巻を催促した。

『社会平権論』の稿料は一冊につき二十五円であったが、だんだんせり上って全部で二千五百円ほどにもなったことである。⁽⁹⁰⁾このことから、同書がいかにベストセラーであったかがわかる。

板垣退助（一八三七〜一九一九、土佐藩大参事を経て、自由民権運動のさきがけ）は、この書に心酔し、自由民権の教科書とみなしたし、宮地茂平（板垣の女婿⁽⁹¹⁾）は、「国家を無視するの権理」(The Rights to Ignore the State) という一項をよんで、日本政府の支配を脱したいとおもい、国籍離脱の届けを役所に提出し、世間をおどろかした。



(上) 板垣退助の肖像
(下) 自由民権論者の図

松島は明治十九年（一八八六）に埼玉県不動岡中学の校長として赴任したが、同校はほどなく廃校になったため東京へもどり、青山学院の教師となり明治三十年（一八九七）まで勤務した。この間、教師の同志会をつくり、教育方針、教授法などを研究しあい、また機関誌を発行して日本風教育を鼓吹した。晩年、赤坂



官憲が自由民権論者を弾圧する図。『新旧時代 自由民権号』(大正15・8)より。

干ふれると、つぎのようになる。

明治十年(一八七七)

(1) 「学問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」(東京大学法理文三学部編纂『学芸志林』第一卷所収、明治10・1)

[西周の演述]

(2)

英国浪斯辺鎖著
日本尾崎行雄訳
同権本論
男女同権論
父子同権論
天

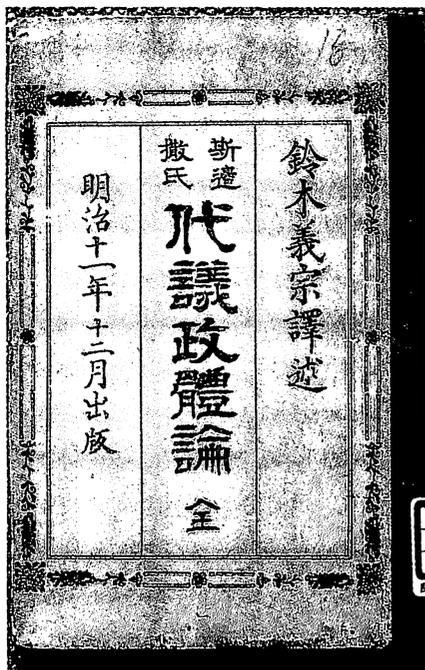
明治十年十二月出版

区会議員、軍人後援会の評議員をつとめた。⁽⁹²⁾

ともあれ、当時政治を論ずるにも、また政治をじっさい行なうにも、その学的根拠をスペンサーの学説や思想にもとめたのである。⁽⁹³⁾

この「自由民権」の雄叫びがもつとも盛んであったのは、西南戦争前後から明治十四、五年ごろまでであったという。そのころの自由民権というものは、幕末の尊皇攘夷の浪士気分、一擧、直訴気分を加味した反政府運動であった。反政府の運動家は「自由民権」といった言葉の本当の内容を理解していなかったし、どうでもよかったのである。ただ権威に反抗したり、反政府の氣勢を煽ることによるこびを感じる、政治運動であったという。⁽⁹⁴⁾

スペンサーの著作物は、明治十年代から同三十年ごろまで、訳書の形であるいは諸雑誌などに紹介記事として掲載されるのである。いまスペンサーに関係した刊行物を列挙し、その中味に若



鈴木義宗訳『代議政體論 全』(明治11・12)
[法政大学図書館蔵]

明治十一年(二八七八)

(3) 英国浪斯辺鎮著
日本尾崎行雄訳
権理提綱 地 地

明治十一年三月出版

権理提綱卷之二

生命並ニ自由之権理 ハルベルト、スベンサー著述
協義社 尾崎行雄 訳

○ 此論ノ如キ既ニ余カ前論ヲ一読スレハ 固ヨリ明瞭ニシテ 故サラ弁論ヲ要セザレトモ 今マ簡單ニ 之ヲ解カン 条規ニ曰ク 他人同一ノ自由ヲ 侵サズンハ 人皆ナ其好ム所ヲ為ス可キ自由ヲ有ス 果シテ然ラハ 生命ヲ保持ス可キ権理アル固ヨリナリ(後略)

(4) 鈴木義宗訳述
撤氏 代議政體論 全

明治十一年十二月出版

(5) 「動物之天性智慧」(『学芸志林』第二卷所収、明治11・4)

ヘルベルト・スベンセル氏嘗テ簡單ナル式ヲ以テ 此二重ノ關係ヲ道ヒ 表ハシテ曰ク 上ニ拳クル所並ニ他ノ生機ノ作用ハ 外部ノ關係ト内部ノ 關係ト相響成スルニ在リト云ヘリ(二〇五頁)。

(6) 「宗敎理学不相矛盾」(『学芸志林』第二卷所収、明治11・4)

ダルウキン スベンセル二氏ノ理論ハ 原来証左ニ依テ断定セル者ニ非

サルカ故ニ 通常ノ理論ト均ク 多ク臆説ノ疑歟アルヲ免レサルカコトシ (後略)

スペインセル氏又曰ク 現今天地間ニ存在スル浩繁 (ひどく混雑する) ノ有生物ハ 其上古 (大昔) ヨリ減スル者ト増ス者トヲ論セス 皆漸次歲月ヲ遂テ創造セラレタルナリト云ヘリ (二六一頁)。

題言

(前略) 此書英國碩學スベンセル氏絶世ノ卓識ヲ以テ 代議政体ノ利害得失ト其立君政体トノ優劣ヲ弁スル者ニシテ 立論皆実験上ヨリ来リ着々 (だんだんと) 適切 人ヲシテ欧州政治上ノ実景ヲ目撃スルノ思アラシム (中略)

海外万里民会 (議會) ノ如何ヲ知ルハ 独り此編ニ在リ 以テ我龜鑑ト為ス可シト 因テ剪劣ヲ揣ラス (よしあしを考えずに) 之ヲ訳述シテ同好ノ士ニ頒ケ 併ラ政治論者ノ参考ニ供スト云云爾 訳者誌

明治十一年十二月

斯 撒氏
代議政体論

英國 斯 撒氏原著

日本 鈴木義宗訳述

詩人シエークスビール氏ハ 蟾蜍 (ひきがえる) ノ容貌醜惡ニシテ 毒氣ヲ含メルモ猶ホ其頭裡ニ宝珠ヲ有テルヲ 艱難ノ惡ムヘキモ 猶ホ人ニ益アルニ比喩セシカ 此比喩ハ独り艱難ノミアラス 之ヲ実事ノ不快ナルニ応用スルモ 蓋シ亦当ラサルニ非サルナリ (後略)

明治十二年 (一八七九)

(7) 米 國 トンプソン氏著
日 本 加藤政之助訳
交際論 初編二

附 経 済

明治十二年二月出版

ハルベルト、スペンサア曰ク 初代ニ於テ 人口ノ多キニ過シハ 社会進歩ノ直接原因ナリト思フニ 人種元来ノ繁殖モ是ニ由テ生シ 人間ヲシテ貧

食ノ慣習ヲ脱シ耕作ノ業ヲ取ラシメタルモ 是ニ由テ起リ 地面ノ開墾モ是ニ由テ成リ 人ヲシテ交際ニ導キ 社会ハ組織シ 交際ノ感覺ヲ発セシメタルモ亦是ニ由テ発シ(後略)

(同書六十六頁)

明治十三年(一八八〇)

- (8) 外山正一著
民権弁惑 全

明治十三年三月出版

火災保険ト火災予防トノ間ニ果シテ區別アルカ

有名ナル英国ノ学士ヘルバート・スペンサーノ如キハ 絶エテ是ノ如キ區別アルヲ知ラズ、皆一樣ニ政府ノ任外ニアルモノト看做スガ如シ。サレバ論者ガ 此ノ區別ヲ立ツルハ 正確ニシテスペンサーノ此ノ區別ヲ立テザルハ誤謬ニ属スルカ。

明治十四年(一八八一)

- (9) 英国ハーバート・スペンサー氏著
日本井上勳訳
女権真論

明治十四年一月発行 思誠堂蔵版

(10) 「倫理学ノ大意」〔文学部教授シ、ゼー、クーパー氏演述、井上哲次郎訳〕(東京大学法理文三学部編纂『学芸志林』第八卷所収、明治14・4)

仮令ヒ 理性ヲ以テ、善悪ノ由ヲ判ル、者ト定ムルモ、此ハ善ニシテ、彼レハ一切悪ナリト謂フ分別アルニ非サルハ、シヂウキク氏既ニ此レヲ論セリ、然ルニスペンセル氏ハ之ヲ駁シテ、反リテ自カラ曖昧ノ中ニ陥レリ、又方今(ただいま)生物学ヲ以テ、世ニ名アル学士ノ説ヲ按スルニ、善悪ノ

間、原ト毛髮ヲ容レス、是ヲ以テ、若シ一言一行ニ就イテ、之ヲ論スレハ、スペインセル氏ノ説ノ如ク、彼ハ此ヨリ善ナリ、此ハ彼ヨリ善ナリト謂フニ帰着スヘシトス（後略）（三一三―三二四頁）

(11) 斯辺瓊著
松島剛訳
社会平権論

明治十四年五月卷一、同年六月卷二、明治十七年二月六卷合本出版 大野堯運出版 報告社発売

(12) 斯辺瓊著
松島剛訳
社会平権論 完
東京 報告堂

明治十四年五月卷之一 出版

凡例

一 此書原名ヲ「ソシアル、スタチツクス」ト題シ、一千八百六十四年米國ノ再版ニ係ルモノニシテ、同等自由ニアラサレハ社会ノ権衡（つりあい）
——引用者）ヲ保持スルコト能ハサル旨ヲ論弁（道理を論じてはつきりさせる）スルモノナリ。故ニ此義ヲ訳シテ社会平権論ト題ス。

明治十五年（一八八二）

(13) 長東宗太郎編
民権家 主権論纂
必読

明治十五年三月
谷山楼蔵版

第四 再び人権親切著者に質し併せて、スペインセル氏の為に冤を解く（外山正一）

スペインセル氏は 吾人々類は 他動物而已ならず、植物と同源に出たるものたることを 最も分明に説かるる所の進化主義者なるに 加藤（弘之）
——引用者）氏は スペインセル氏の権衡論を自ら誤解せらるるとは知られずして、意気揚々として、スペインセル氏其人の如きも自身は 立派なる非天賦



乗竹孝太郎訳『社会学之原理』
(明治18・4)
[法政大学図書館蔵]

人権者流なりと思ひ居ることなるべけれども、其実は矢張り吾人々類の真に他の動物と同源に出でたるものなることを知らざるものなり杯と云はれたるこそ、抱腹絶倒の至なれ。⁽⁹⁵⁾

(14) 乗竹孝太郎訳述
外山正一関
社会学之原理 甲乙

明治十五年四月

○ 凡例

社会学之原理ハ、英国学者ヘルベルト、スペンセル氏ノ著述ニシテ、原名ヲ「プリンシプルス、ヲフ、ソシヲロジ」ト云フ。此度我東京経済学講習会ニ於テ、講義録ヲ発行スルニツキ、余此書ヲ訳シ、外山正一先生ノ是正ヲ請テ之ヲ読者ニ示ス(後略)

訳者記ス

明治十五年四月

社会学之原理第一卷

英国 ヘルベルト、スペンセル原著
日本 外山 正一 関
日本 乗竹孝太郎訳述

第一篇 社会学之根本

第一章 超越有機的ノ醇化

醇化ノ三大種類ノ中ニ就キ、余ハ今第三種類ヲ論ス可キ場合ニ達セリ。其第一種類タル、無機的ノ醇化如キハ、若シ之ヲ論スルトキハ、二卷ノ書ヲ要シ

一卷ニハ天^{アストロセニ}物ヲ論シ 一卷ニハ地^{ゼミセニ}物ヲ論スベキナレドモ 抑^{おさ}モ醇化ノ理ヲ下等ナル者ニ適用セシガ為メニ 上等ナル者ニ適用スルヲ遲滯スルハ 甚^{はな}タ願^{はな}ハシカラヌ「ユヘ」之ヲ略セリ(後略)

(15) 英国 斯迈瑣著
尾崎行雄訳
權利提綱 改訂

原書は H. Spencer の *Social Statics* の抄訳。

明治十五年六月再版 丸善齋書房出版

(16) 英国 學士波、
斯迈瑣氏著
日本 山口松五郎訳
刑法原理獄則論綱 完

明治十五年十月印行

(17) 「天賦人權論」〔明治十五年(一八八二)十一月十一日に開催された国友会政談討論演説会において、加藤弘之君の「人權新説を読む」と題して、馬場辰猪が行なった演説の筆記〕〔朝野新聞〕明治15・11・17、12・3まで十一回にわたって掲載されたものの一部〕

スเปนサー氏^{かう}嘗^かテ曰ク、凡^{おほ}ソ想像ハ確説ノ基礎トナル者ナリト、然レバ即チ進化ノ主義ニ拠テ 之ヲ考フレバ 人間社会ノ事物ハ 概ネ始ヨリ完全ナル者有ルコトナク 亦動物ノ如キモ其始メハ 極メテ不完全ナル者ニシテ 漸々其進化スルニ随ヒ 形体ヲ具シ 然ル後始メテ完備スルモノナリ、思想上ノコトト雖ドモ亦然リ、其始メハ蒙朧タル 妄想説ニ起リ 進化シテ上達シ 終ニ確乎タル一大主義ニ至ルモノナリト謂ハザルベカラズ(後略)⁽⁹⁶⁾

明治十六年(一八八五)

(18) 馬場辰猪著
天賦人權論 全

明治十六年一月出版 朝野新聞社会兌

(前略) スペンサー氏嘗テ曰ク、凡ソ想像ハ確説(じつせつ)——引用者——トナル者ナリト。然レハ即進化ノ主義ニ依テ之ヲ考フレハ、人間社会ノ事物ハ 概ネ始メヨリ完全ナル者有ル」ナク 亦動植物ノ如キモ 其始メハ極メテ不完全ナル者ニシテ 漸々其進化スルニ隨ヒ 形体ヲ具シ然ル後始メテ完備スルモノナリ (後略)⁽⁹⁷⁾

(19) 仏国 グエイラ著
日本 島洲生訳

スペンセル政治論略

明治十六年六月 出版

(20) 斯辺瓊原著
山口松五郎訳

道德之原理

明治十六年七月出版

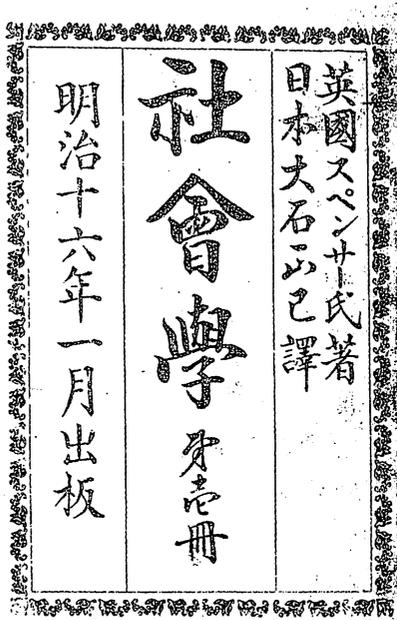
原書は H. Spencer の *Principles of Ethics*, New York.

(21) 英国 斯辺瓊著
日本 大石正巳訳

政体原論

明治十六年十月刊行 松井忠兵衛発兌

原書は H. Spencer の *Political Institutions*, in *Principles of Sociology*, 2 vol.



高知県土族・大石正巳が訳したスペンサーの社会学。

(22) 英国 土波 斯辺瓊氏著
日本 山口松五郎訳

松永保太郎出版

(23) 英国 スペンサー氏著
日本 高知県土族大石正巳訳

原書は H. Spencer の *The Study of Sociology*, 1873.

明治十六年十一月 卷ノ五出版 出版人 東京府平民西村玄道

(24) 英国 波斯辺境著
官城政明訳
代議政体覆義

原書は H. Spencer の Representative Government.

明治十六年十二月出版 加藤正七發行

明治十七年(一八八四)

(25) 「スベンセル氏哲学論」(馬場辰猪)『国友叢談』第一編所収、明治十七年一月九日)
スベンサーの『第一原理』を平易に説明するつもりであったが、一回きりでやめた。

(26) 東京大学^法三学部一覽 從明治十六年
至明治十七年

東京大学

明治十七年二月出版 出版人 丸家善七

第三 社会学

哲学ノ主義ニ協合スル(やわらぎあう、和合する) 社会組織ノ狀況ノ稍(すこし) 緊要ナルモノヲ 充分ニ曉知セシムヘキ概旨ヲ教示ス
参考書ハ スベンセル氏著社会学 モルガン著古代社会論ヲ以テシ 専ラ講義ヲ用ヒテ教導スルモノトス
近世哲学(第三年)

欧州近世哲學家中 最モ著名ナル三氏ノ哲学ヲ一層細密ニ講ス(中略) 三氏トハカント、ヘーゲル、スベンセルニシテ 蓋シ其哲学ノ現時ノ問題ニ最
モ緊切ナル(ひじょうに重要である) 關係ヲ有スルモノナルカ故ニ 乃チ撰採スルナリ

教科書ハ カント氏著純理論 ワレース氏著ヘーゲル氏論理学、スベンセル氏著心理学第二卷(後略)

(27) 英 スベンサー氏著
馬場辰猪序・松本清濤 西村玄道訳
万物進化要論

明治十七年四月出版 民徳館發兌

(28) 英 ハーバート、スペンサー著
派野定四郎、渡辺治共訳
政法哲学 前後二編 原書は H. Spencer の *Principles of Sociology*, 2 vols, Political Institution の一部。

(前編) は明治十七年十月刊、(後編) は明治十八年十二月刊
石川半次郎出版

(29) 英国 スペンサー著
日本 山口松五郎訳
哲学原理 上下二巻 原書は H. Spencer の *First Principles*, 1880.

明治十七年十二月 上巻出版 加藤正七發行

(30) Herbert Spencer: *Education, Intellectual, Moral, and Physical*, Tokio, 1883.

明治十八年二月、原文のまま出版。発行人 岩藤錠太郎、加藤鎮吉、亀井忠一、石川貴知。

明治十八年(一八八五)

(31) 英国 スペンセル氏著
日本 乗竹孝太郎訳述
社会学之原理

明治十八年四月

(14)を再刊したもの。反訳および出版は、経済学講習会、印行は秀英舎、経済雑誌社発兌

(32) 文学士有賀長雄撰
文学叢書 第一冊

丸善商社書店発兌

明治十八年八月

第十節 人の性命(いのち)——引用者)は 大和(日本特有の事物)を現すに在り

(前略) スペンセル氏の愛他論(じぶんを犠牲にして、他人の利益や幸福の増進をねがう)は、人類の万物と共に変遷するに際し、境遇に応接するに拙なる者ハ敗れ、巧なる者は榮ふるに従ひて益々善に進む次第を述べたる者なり(五一頁)。

同書の第二冊(明治18・12刊)——「聖門哲学論上」にスペンサーの名をみる。

善とは常に適當の(ほどよい)意——引用者)義を示するの語にして 生存競争の間に適種保生の理に因て生したる者なり、美とは神経の組織に斯云々の次第あるに因て起るの感なりと言へり、スペンセル以下の進化論者の保持する所是れなり(七―八頁)。

明治十九年(一八八六)

(33) 末広重恭著
二十三年未来記

明治十九年六月

泰西哲学ノ我邦ニ入りシヨリ 社会ヲ拳ケテ一時ニ之レニ風靡シ 其ノ洋学ヲ修メ 僅ニ「リードル」(読本——引用者)ヲハ英米歴史ノ数巻ヲ読ミシ者ハ 直チニ進ンテ哲学ヲ攻究セント欲セザルハ無ク 五六年前ニテハ 書生ノ喜ビテ談スル所ハ ポツクル ギゾーミル氏ノ著書ナリシガ 近来ハ一変シテ スペンサートナリ「スタチック」(Statics)「スタアデー、ヲフ、ソシオロジー」(Study of Sociology)、如キハ家々ノ帳裏(たれまく)をめぐらした内部)ニ 此ノ書アリ(八六頁)。

(34) 英国 瓊辺徹先生著 板垣退助序
高橋達郎訳
宗教進化論

明治十九年六月 板垣退助出版

原書は H. Spenser's *Religious Retrospect and Prospect*.

(35) 評纂 新体詩選

毛野 首藤次郎校閲
南紀 竹内隆信纂輯

明治十九年九月 出版

○ 醒ニ睡氣一

種々の学者の多き中（中略）洛克 培根 彌兒 牛董 降て達兒尹 蘇辺薩 伊太利国の加里列阿子（九頁）

(36) 中央學術雜誌
同政會編纂

明治十九年十一月二十五日発売 第四十一号

翻訳

○ 哲学ノ定義

ハルバアト、スペンサア原著

英学科得業生（いまの学士——引用者）佐竹時之助訳

本篇ハ須氏（スペンサア引用者）哲学原理ニ出ツ 須氏人類ノ思議シ（考える）得可キモノト 思議シ得可ラザルモノトアルヲ説キ 物ノ真性ハ識ル能ハズト論ジテ 終ニ哲学ノ定義ヲ下ダセリ

第一節

吾人（われわれ）——引用者——ノ五官ニ現ハレテ 森羅万象トナル物 其物ノ真性（しぜんにもっている性質）ハ 吾人得テ 之ヲ知ル能ハザルナリト断言シ 了ラハ更ニ疑問ノ起ルアラン 曰ク 果^{不明}然ラハ 吾人ノ知ル所ノモノハ何ソヤ

吾人ノ知ルトハ 如何ナル意義ニ於テ 称スルモノナルヤ 吾人ノ最モ吾人ノ最モ高尚ナル智識トハ 何ヲカ称スルヤト 実体哲学 則チ現象ト全ク 異ナル実体ノ何タルヤヲ説明スル哲学ヲ以テ 到底成立シ得可キモノニアラストシテ（後略）（二七—二八頁）

(37) 英國 斯辺撒著
有賀長雄訳
標註斯氏教育論 上下二卷

原書は H. Spencer の Education, Intellectual, Moral and Physical, 1885.

明治十九年十一月 牧野善兵衛出版

明治二十年（一八八七）

(38) 農學士 菊池熊太郎著述
男女心理之區別

大阪 積善館

明治二十年一月刊行

女子を輕ずるの風は 天下一般の風習に非ずして「ルボック」「スペンサー」諸氏の著書に就て見るときに 女權男權に優るの風俗ある社会の例少なからず(十四頁)

スペンサー氏曰く 封建制行はると所には 必ず家長權行なわる、ものなりと「社会学原理」(十七頁)

「スペンサー」氏曰く 男女心的の差異あるは 恰も生理的の差異ある如しと(五二頁)

(39) 哲学会雑誌 第一号

明治二十年二月五日發行

○ 本会雑誌ノ發刊ヲ祝シ、併セテ會員諸君ニ質ス

加藤弘之

(前略) 凡ソ欧米ニアリテハ 哲学ノ如キモ 他諸般ノ學術ト等シク 学会ヲ設立シ 雑誌ヲ發行スルノ頗ル盛ニシテ 各派概シテ各個ノ学会アリ 各個ノ雜誌アリテ 各其主義ヲ擴張シ 以テ學理ノ進歩ニ就テ相競争ス 例ヘハ デカート ベーコン カント ヘーゲル コント ベンサム ショツペンハウエル スペンセル ハルトマン等ノ論派カ 互ニ自己ノ主義ヲ擴張スル所ノ雜誌ヲ發行シテ 以テ相競争スルノ類 是レナリ 吁盛ナリト云フヘシ(一―二頁)。

(40) 辰巳小次郎著
斯氏哲学要義

明治二十年四月 哲学書院發行

同書はスペンサーの *The First Principles* の要点だけを訳述したもの。

(41) 哲学会雑誌 第四号

明治二十年五月五日發行

○ 論 說

ユーチリタリアニズム(功利教)ヲ論ス(承前)

文学士 嘉納治五郎

(前略) 社会ノ幸福ヲ増進スルヲ以テ 人間ノ目的トスルノ理由ト為ス能ハザルナリ

今進化主義ニ由テ 之ヲ論スルコトキハ 又一步ヲ進メテ答弁スルヲ得ベシ 例之スペインサーガ所謂進化シタル社会ニ於テワ 只各人が自己ノ身ヲ護リ 子孫ヲ養育シ 他人ヲ害セザルニ 止マラス(二五五―二五六頁)

(42) 哲学会雑誌 第八号

雜誌二十年九月五日発行

○ 論説

有神哲学

小崎弘道

(前略) 夫ノスペインセルハ 此世界ノ初メハ 悉ク平均シタモノガアツテ 其モノガ段々変化シテ 世界ノ様ナモノガ出テ来タト云フ(三九五頁)

宇宙ヲ時計ニ譬ヘ 又ハ人間ノ目ノ杯ヲ引イテ 神ノ働キヲ説明サウト思ヒマス 之ヲスペインセルハ大工論(カルペントタルシオリ)ト申シマシタ(三九九頁)

○

日本ニ於テ哲学上ノ急務ナル問題 テニング

第二 衆多ノ(多くの)引用者 書籍ヲ訳述 或ハ編纂シ之レニ 錯フルニ其自論ヲ以テスルモノ 即チスペインセル氏ノ不可知論的、普通總念ノ説

功利教論ノ如キコレナリ(四〇一頁)

(43) 文学士 有賀長雄先生著
増補 社会進化論 全

同書の初版は、明治二十年二月。

東京 牧野書房刊

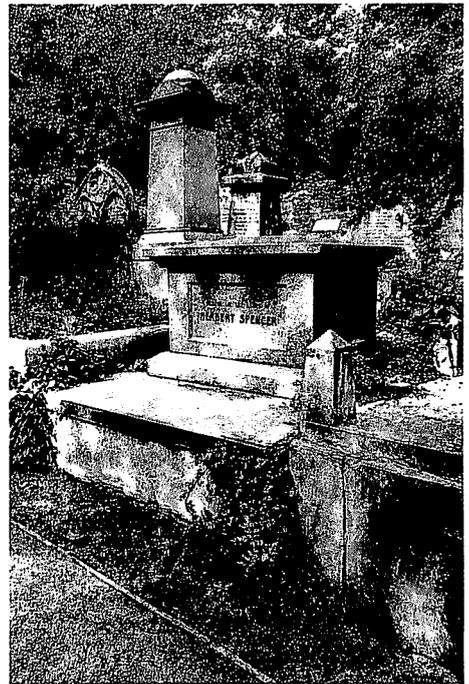
明治二十年十月 再版

増補 社会進化論 凡例

(前略)



ハーバート・スペンサーの肖像
中島力造『スペンサー氏倫理学説』（明治42.6）より。



「ハイゲート墓地」（ロンドン郊外）
にあるハーバート・スペンサーの墓。

[筆者撮影]

一 此学（社会学——引用者）を専修する人、泰西と雖多からず、之ヲ講ずるの書に至ては、未だ殆ど無し、是れ此学の起る日尚ほ浅きに因るなり。独り英国の哲学士ハルベルト、スペンセル氏、一家の哲学を立てむとて、其一部分として、社会進化の理（すじ道）を講究。「哲学全書」の第四部として「社会学之原理」三巻を著す（後略）（一頁）。

(44) 三木愛花仙史蔵著
百鬼 会仮粧舞
夜行

東京 共隆社発兌

明治二十年十一月 出版

(前略)

一 此国演説者の模様

演説は尤も世論喚起し、人心を鼓舞するに功能あるもの、如し、其演説家にはルーソーを以て自任するものあり、スペンサーを以て秘かに比る人あり、モンテスキウを友となし、ギゾーを兄弟と為し、常に慷慨の演説を試みしかば、其化粧ルーソー、スペンサー等多かりし為めに、大に演説者の声価を落せ

り(二五六—一五七頁)

明治二十一年(一八八八)

(45) 哲学会雑誌 第十九号

明治二十一年八月五日発行

○ 論 説

社会学史略(第一回) 文学士 有賀長雄

社会学ノ世ニ出ツル日 尚ホ浅シト雖モ 既ニシテ大ニ進歩ノ見ル可キアリ コント、スペインセルハ言フニ及バズ 其名未タ多ク本邦人ニ知ラレスシテ 既ニ此ノ学ノ大家タル者ヲ挙クレバ(後略)(三七九頁)。

(46) 哲学会雑誌 第二十号

明治二十一年九月五日出版

進化説沿革一斑 会員 谷本 富

進化ト云ヘル語ハ 今ハ既ニ普通ノ語トナリヌ(中略) 十中ノ八九ハ 未タ嘗テ進化論一部ノ書ヲ讀ミタル「アルニアラス、唯タ臚氣ニ進化論ハ斯クアルヘシ、斯クアリナシ、固是レ故 ダルウヰン氏ノ創擬スル(人に先駆けてとなえる)所ニシテ スペインサー氏ノ集成セル者ナリ(まとまったものに作りあげる—引用者)(四五九頁)

(中略) 此外心理ノ進化ハ スペンサー氏之ヲ始メ、及ヒ、社会、国民、国語、宗教、風俗、芸術、制度、文物モ皆ナ進化ノ則ニ従フ者ナル」モ(後略)

此等諸氏ハ 皆ナ進化学ノ教師ナリ、發明者ナリ、而テ之ヲ集大成シタル者ハ 実ニスペンサー子トス、同氏ノ総合哲学ハ即チ進化哲学ナリ(四七三—四七四頁)

(47) 哲学会雑誌 第二十一号

明治二十一年十月五日出版

○ 論説

強者ノ権利ト道德法律ノ関係

文学博士 加藤弘之講演

(前略) 始メテ世間ヲ叱咤シ、社会学林ノ門額ニ「凡ソ此川ニ入ラント欲スル者ハ 先ツ其情心ヲ全脱スベシ」ト大書シ 以テ此ノ学ノ面目ヲ一新シタルハ 次ニ批評セントスルスペインセル氏ノ逸事ナリ(五四五頁)

(48) 英国波、斯辺瑣氏原著
日本文学士 高田早苗校閲
平松健太郎訳述
代議政体得失論

原書は H. Spencer の Representative Government.

明治二十一年十月出版 富山房書店発行

(49) 哲学会雑誌 第二十二号

明治二十一年十一月五日出版

○ 論説

博士スタイン国家及ヒ社会論

文学士 有賀長雄

国家ハ人類ノ聚合(あつまり)——引用者) ヨリ成レル有機団体ナルカ 社会モ亦會テ社会進化論ニ於テ証明シタルカ如ク 人類ノ聚合ヨリ成レル有機団体ナリ(中略)

英国ノ学者中ニモスベンセル 社会国家ノ差別ニ関シ 明瞭ナル議論ハ見エズ(五七五頁)

明治二十二年(一八八九)

(50) 哲学会雑誌 第二十七号

明治二十二年五月五日出生

支那古宗教論(承前) 会員 谷本富

スペンサー曰ク 宗教心ノ発端ハ 靈魂別在ノ迷信ニ在リ、靈魂別在ノ迷信由リテ来ル所ハ、夢ノ誤解ナリ、(二三〇頁)

スペンサー曰ク 耶蘇教ノ要トセル靈魂復活論モ亦、原始人カ懐抱シタリ(いづく——引用者) 此迷信ヨリ変遷シ来リタル者タルニ過ギズト(一三三頁)

雜録

○ 日本哲学の現況 (T.T.)

(前略) 従来はスペンサーも、ミルも、ペインも、其書概ね皆な英学校の読書科に用いられたるのみなるを、甚しきは哲学書類を翻訳公行せし有名な学者先生も、実は毫も哲学の何たるを弁ぜず、只管文字をたどりて字訳せられたるばかりにて、従て誤訳にあらざれば詰屈(文章がむずかしく読みにくい——引用者) 難解もの多きは 頗る嘆息に堪えずとす(一六二頁)

スペンサー氏はミル氏よりも一層広く流布したり、某外人日本のスペンサー流行には吃驚したりと物語りぬ(一六三頁)

(51) 哲学会雑誌 第二十九号

明治二十二年七月五日出生

○ 宗教学につきて(承前)

又スペンサー氏の如きは 主として社会進化の順序に基きて 宗教的現象の説明を為さんとする者の一例なり スペンサー氏の論する所頗る臆断に過ぐるの癖ありと雖も 彼の自己の宗教を除きては 全く他の宗教を度外視する狭隘なる学者の所論に比すれば 其勝る所の多き 固より疑を容れざるなり(二八六頁)

明治二十三年(一八九〇)

(52) 英ハーバート・スペンサー著 島田豊訳

斯迈瑣代議政体論

原書は H. Spencer の Representative Government.

明治二十三年三月出版 大倉書店発行

(53) 英 スペンサー著
萩原民吉訳
非国会論

(54) 「板垣伯に與えるの書」(『國民之友』第一一四号所収、明治二十四年四月三日發兌)

(前略) 閣下を似て 明治の新人物と為すは、誤れり、閣下は依然たる維新前の人物なり、たゞ從來の勤王討幕家が、スペンセルを読みたる迄なり、閣下が氣節きせつの卓然たくぜんたるは(意氣と節操がとびぬけている——引用者)、新日本の書生に非らずして、旧日本の武夫ぶふ(勇士)に在り(第八卷、四九六―四九七頁)

明治二十五年(一八九二)

(55) 英國 碩学斯迈徹原著
神戶日報主筆 千田鈞訳述
利勢論 一名官卑民尊論

明治二十五年十月出版 神戶日報發売

(56) 英國 スペンセル著
日本 田中登作訳
斯氏倫理原論

原書は H. Spencer の *Principles of Ethics*.

明治二十五年十一月出版 普及舎發売

(57) 「スペンサル氏病篤やまゝあつし」(『早稲田文学』第三二号、明治二十六年一月三十日發兌)

本月十五日の『国会』と十七日の『毎日』との記事に依れば 総合哲学の泰斗 ハルベルト、スペンサル氏は 十数年以前より健康 大に衰へて 専心著述に従事すること能はざるやうになり 現に千八百七十九年倫理学史料を著せし時にも 其の序文中に「健康の衰へたるため 多年經營せる総合哲

学の大目的たる道德の主義を発表するに及ばず」(中略)

八日倫敦発の報によれば 今や同氏の病甚だ篤く 倫敦レゼント公園の私宅に在りて 病臥せりと云々(四三頁)

明治二十六年(一八九三)

(58) 哲学雑誌 第八卷

明治二十六年十二月

雑報

「スペンサー」氏倫理学原理第一卷

(Principles of Ethics By Herbert Spencer. Vol. I. N.Y.D. Appleton & Co.)

「スペンサー」の著作とし云へば、一時は天下を傾動し、書生を問はず、学者を論せず、苟も耳あるものは其名をきかざるなく、苟も目あるものは其巻を緇かざるなし。

特に我邦維新以来の学者と称せらるゝものに至つては、「スペンサー」の著作は 実に一種不可思議の力を有せりと云ふも 恐らくは過言にあらざる可し。氏の著書は累々として日に月に輸入せられ、倫理学者も之を講し、心理学者も之を読み、動植物専門家も之を習ひ、社会学研究家も之を学へり(六三七頁)

(59) 英スベンサー著 高田早苗 英語法律科得業生 小野得一郎 訳
政事上の大謬信

原書は H. Spencer's *The Great Superstition.*

明治二十七年(一八九四)



渋谷 保編『哲学大意 全』(明治27.2) [筆者蔵]

(60) 英国大儒 スペンサー新著
法学士 永井久次 訳述
個人対国家論

原書は H. Spencer の *The Man versus the State*, First edition, 1884. Reprinted with abridged and revised of Social Statics.

明治二十七年一月出版 博文館発売

(61) 渋江 保編
哲学大意 全

明治二十七年二月出版 博文館発売

英国の碩学ベーコンが 実 験 哲 学 (実物に徴するを主とするもの) を主唱してより 同国の学者ロック及び今のスペンサー等の諸氏は此の派に属し(中略)、殊に形而上学派の方は ヘーゲルに至りて極まり、実験学派の方は スペンサーに至りて極まりければ、二氏が哲学の相反することは 恰かも東西の如し(六頁)

明治三十一年(一八九八)

(62) スペンサー原著
藤井平訳
綜合哲学原理

原書は H. Spencer の *First Principles*, 4th edition.

明治三十一年八月 出版 経済雑誌社発行

(63) 「ハーバート、スペンサー氏の『総合哲学』終巻を読む」(『国民之友』第三三七号所収、明治三十年二月二十七日発売)
第十九世紀の冠冕(首領——引用者)

ハーバート、スペンサー氏、一代の大作なる『総合哲学』を完結せり。『社会学原理』(『The Principles of Sociology』, vol. III.) は、実に其終巻也。氏か此大著作“System of Synthetic Philosophy”. (総合哲学体系) を大成せしは、前後三十六年の長星霧を費せし也。此間氏は身心の和を失ひ、幾多の窮困に遭遇せしも、長江の流れて止まざるが如き龍勉(勉めはげむ)を以て、之に当り、七十六歳の高齡を以て、曠世(世にまれな)の著述を稿了せしは、独り氏の光榮なるのみならず、第十九世紀の冠冕なり(四六五頁)

なお、「スペンサーとヘーゲル」「スペンサーの観察力と考証力」「スペンサーの『職業進化論』」などの記事がつづくが、いまはそれにふれない。

明治三十七年（一九〇四）

(64) 哲学雑誌 第十九卷 第二〇六号

明治三十七年四月十日発兌

スペンサー氏の社会学系統

遠藤隆吉

此の篇は 他の目的のために稿せし者なるが故に スペンサー氏全体の社会学を鈔出したる（えがく）にあらず、スペンサー氏全体の要点を鈔出するは更に他日を期す。

スペンサーは コムトの創始せる社会学なる名辞を襲用せり。其の斯学に関する著述は

Descriptive Sociology.

The Principles of Sociology.

Social Statics.

The Study of Sociology.

Illustration of universal progress.

なり。

然れども氏が社会学の根本思想は、之を其れ等の著述中に索む可らず、其哲学に於てせざる可らず、氏が第一原理を著はしたる精神も亦 コムトと同じく一切の科学に付て統一する所を発表せんとするに在り（三六四頁）

以上掲げたスペンサー文献は、明治十年代から同三十年代までのものである。スペンサーの単行本としてあるいは政治論として紹介されたもの、また雑誌などにおいて、スペンサーに言及したものなどである。ことに当時の政治論をのべた論著の中のいたるところに、スペンサーの名がみられるし、その学説や思想の断片が引用されている。



PACIFIC MAIL STEAMSHIP COMPANY

Service Direct des Paquebots Américains
ENTRE
la Chine, le Japon et New York.

LE PAQUEBOT

"CITY OF PEKING"

Capitaine CAVARLY,
SERVA EXPÉDIÉ pour SAN FRANCISCO,
vers le 2 Septembre 1878.

フェノロサ夫妻が乗った

「北京市」号の新聞広告。

["L'Écho du Japon", 1878.8.10付] より。

当時は欧化主義の全盛時代であり、横文字や片仮名が大いにはやったところで、政治について語り、またそれを実践するにしても、その学問的根拠をスペンサーの学説に求めたこと⁹⁸から、スペンサーやミルの思想がいかに政論家の心をとらえていたかがわかる。

また明治以前の日本語は、和語（やまとことば）がもとになっており、それによって外国から漢語が混入して、和漢混淆の文体であった。明治初年以降、西洋の文学、政治、経済、社会などが移入されるや、それらを邦語に訳すことが始まったのであるが、一般に行なわれた翻訳法は、原文をすべて忠実に訳すのではなく、大意をとって縮訳するやり方であった。

総じて明治期の文章は、漢語がやたらと多い、漢文直訳式の日本語である。漢文調の和文が日本を風靡したのが、明治という時代であった。

注

(1) フェノロサ夫妻の来日を報じる新聞記事はいくつかある。たとえば、「The Japan Weekly Mail」[Aug. 10, 1878]の「船舶情報」(Shipping Intelligence)に載ったもの。それによると、夫妻を乗せた「ペキン市」号(The City of Peking, 外輪船「五〇六九トン」、船長Cavarty)は、八日九日に横浜に到着した。同船には欧米人の船客以外に、三等船客の中国人が一七七名乗っていた。

ほかに記事がないか捜したところ、「L'Écho du Japon」[Samedi, 10 Août 1878]の「乗客」(passagers)の欄に、「E. F. フェノロサ教授とその妻」(Professeur E. F. Fennallosa et sa femme)とあった。横浜で刊行された英仏のこれらの二紙は、何もふれていないが、じつは「ペキン市」号には、前年の七月北海道の沖合いで遭難し、漂流中、ことしの六月になって、アメリカに帰航中の帆船エジセリトン号に救助された日本船の生残り四名が乗っていた。

遭難した船は、越中国東岩瀬(富山県北部―神通川河口の西岸)―馬場道久の持船(千石積、乗組員十二名)であった。同船は明治十年五月、東岩瀬港を出帆し箱館へ着したのち、釧路の秋吉港で、コンブや搾めかす(魚や大豆の油をしぼったあとのかす。肥料)などを積んで七月箱館に寄港する途中、海難に遭ったのである。その船には二十四名の日本人(乗客をふくむ)が乗っていたが、アメリカ船に救助されたとき、生存者はわずか四名

であった〔郵便報知新聞〕明治11・8・12付〕。〔横浜開港資料館蔵〕

(2) Lawrence W. Chisolm: *The Far East and American Culture*, Greenwood Press, Publishers, Connecticut, U.S.A, 1963, P.5

(3) 磯野直秀『モースその日その日——ある御雇教師と近代日本』(有隣堂、昭和六十二年十月)、九九頁。

(4) 清水幾太郎『日本社会学の成立に就いて』(『思想』第一三八号所収、昭和八年十一月)、一頁。

(5) 馬場明男(一九二八〜)『社会学小史』(エルガ、昭和四十一年六月)、一三三頁。なお、同書は初学者(聴講者)のために書かれた入門書的な社会学史である。第一章 社会学の成立、第二章 社会学の歴史、第三章 十九世紀の社会学、第四章 フランス社会学、第五章 ドイツ社会学、第六章 英米社会学とつづき、第七章から第八章にかけて、日本社会学の歴史、戦後のわが国の社会学について叙述している(一五六〜二九九頁)。平易、明解な好書である。

(6) 明治から平成のこんにちまでの間に、わが国で刊行された膨大な社会学文献の中から、日本の社会学史に関する論著だけを拾い出し、それに一通り目を通した結果、いろいろ教えられる点があったことは事実である。けれど資料に基づく真に手堅い、実証的かつ体系的な研究となると実に少ないことが分かった。一応、本稿を草するにあたって、一読し、示唆をうけたのは左記の文献である。

* 下出隼吉「明治社会学史資料」(一)(二)〔社会学雑誌〕第十八号、第二十三号所収、大正14

* 高田保馬「一九〇七年前」〔社会学徒〕第一卷第二号所収、昭和2・5)

* 小林郁「明治三十年代の社会学界」〔社会学徒〕七月号所収、昭和2・6)

* 「東大社会学研究室創立二十五年記念会記事」〔社会学雑誌〕第四十八号所収、昭和3・4)

* 布川静淵「明治三十年前後の社会学界、社会運動に関する追憶談」〔社会学雑誌〕第五十三号所収、昭和3・9)

* 下出隼吉「フェノロサと日本の社会学」〔社会学雑誌〕第五十八号所収、昭和4・2)

* 高田保馬「日本に於ける社会学の発達」(『岩波 教育学』第十八冊)岩波書店、昭和8・3)

* 清水幾太郎「日本社会学の成立に就いて」(『思想』第一三八号所収、昭和8・11)

* 松本潤一郎「我国社会学研究の沿革」(『日本社会学』所収、時潮社、昭和12・12)

* 河合弘道「第二章 日本社会学の源流」(第二節 日本社会学の淵源としての記紀」(『日本社会学原理』所収、昭森社、昭和18・1)

* 小山隆「日本社会学」(『社会学史』所収、実業之日本社、昭和23・10)

* 蔵内數太「幕末明治の社会学」(『戸田貞三博士還暦 祝賀記念論文集』現代社会学の諸問題』所収、弘文堂、昭和24・2)

- * 「第四節 日本社会学」(『社会学通論』所収、同文館、昭和25・5)
- * 新明正道 「第八節 日本社会学の發展」(『日本における社会学の現状』(『社会学史』所収、有斐閣、昭和26・2)
- * 早瀬利雄 「明治初期における日本社会学前史の研究——社会学者としての西周とコントの実証主義」(『大倉山論集 第一輯』所収、大倉山文化科学研究所、昭和27・6)
- * 「第六章 日本社会学の發展」(『講座 社会学』所収、有斐閣、昭和28・4)
- * 新明正道 『社会学史概説』(岩波書店、昭和29・2)
- * 『東京大学文学部 社会学科沿革七十五年概観』(『非売品』、東京大学文学部社会学研究室、昭和29・8)
- * 馬場明男 「第七章 日本社会学の歴史」(第八章 戦後わが国の社会学」(『社会学小史』所収、昭和41・6)
- * 斉藤正二 「明治三十年代における日本社会学」(日本大学社会学研究室『社会学論叢』三十六号所収、昭和42・3)
- * 新明正道 「建部遜吾博士の片影——明治社会学史の一齣」(日本大学社会学研究室『社会学論叢』三十七号所収、昭和42・5)
- * 大道安次郎 「明治三十年代以後におけるアメリカ社会学の導入」(同右『社会学論叢』三十七号所収、昭和42・5)
- * 横山寧夫 「第六章 日本社会学の發展」(『社会学史概説』所収、慶応通信、昭和46・9)
- * 河村望 『日本社会学史研究(上)(下)』(人間の科学社、昭和48・9、50・12)
- * 斎藤正二 『日本社会学成立史の研究』(福村出版、昭和51・9)
- * 秋元律郎 『日本社会学史——形成過程と思想構造』(早稲田大学出版、昭和54・5)
- * 柴田隆行 「明治期日本の〈西洋哲学史〉移入史」(『白山哲学』第二十五号所収、平成2・3)
- * 富永健一 「戦後日本社会学の發展とその問題」(日本社会学史学会『社会学史研究』第十五号所収、いなほ書房、平成5)
- * J. Matsumoto: *Soziologie in Japan*, Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie, Verlag von Duncker & Humblot, München und Leipzig, 1923, P. 289~P.291
- * Jesse Frederick Steiner: *The Development and Present Status of Sociology in Japanese Universities*, The American Journal of Sociology, Vol. 41, No.6 (May, 1936), P.707~P.722
- * *Sociology Past and Present in Japan*, Japanese Sociological Society, 1937, P.1~P.4
- * Jeremy C. A. Smith } 'Society' and 'Sociology' in the Meiji Era Japan: 1860s-1880s.
Teruhito Sako }

いうまでもなく、学史の研究にとっていちばん重要なのは資料である。ネタは新鮮であることに越したことはない。未発見のものであれば、調理の方法しだいでは、最高の味を引き出すことができる。研究もいわば創作料理とおなじである。しかし、良質の素材はどこにでもころがっているわけではない。それと出会えるのは、僥倖なのである。

日本における社会学の発展史について叙する場合、まず前史として社会学の起源、ついで成立の条件や過程発達段階について、順を追って講究すべきである。がこのようなプロセスを踏まえて作成された研究報告は、じつさい少ないのである。

先に引いた論著の中で、参考となる良い文献は、せいぜいつぎの五、六点である。松本潤一郎の「我国社会学研究の沿革」、新明正道の「日本社会学の発展」と「日本における社会学の現状」、早瀬利雄の「明治初期における日本社会学前史の研究——社会学者としての西周とコントの実証主義」、単行本としては馬場明男の『社会学小史』と齋藤正二（日本大学社会学科教授）の『日本社会学成立史の研究』等である。

馬場明男の『社会学小史』は、平易に書かれた社会学入門書としてもひじょうにすぐれている。齋藤正二の『日本社会学成立史の研究』は、多年にわたって蒐集した文献資料を利用して書き上げた著述である。これよりつばな書物である。齋藤は馬場が、日本大学人文学部社会学科ではじめて演習を担当したときの最初の教之子であり、昭和四十一年同書を学位請求論文として提出し、文学博士を授けられた（馬場明男『社会学史論集』時潮社、昭和50・4）。

齋藤のこの著書は、「学史としては空前絶後ともいうべき力作であろう」（馬場明男）という。官学アカデミズムにもみられぬ、好書であることは間違いない、もっと高く評価されてしかるべきである。その他、柴田、富永論文もなかなか捨てがたいものがあり、教えられるところが多かった。

- (7) 榎俊雄 阿閉吉雄 編『社会学通論（増補版）』（同文館、昭和二十八年二月）、三九五頁。
- (8) 『社会科事典 第四卷』（平凡社、昭和二十四年二月）、二四一頁。
- (9) 『望月仏教大辞典 第四卷』（世界聖典刊行協会、昭和十一年十一月）、三七八七頁。
- (10) 注(8)の二三九頁。
- (11) 講座『社会学』（有斐閣、昭和二十八年四月）、二六七頁を参照。
- (12) 『福沢諭吉全集 第十九卷』（岩波書店、昭和三十七年十一月）、三六七頁。
- (13) 『福沢諭吉選集 第一卷』（岩波書店、昭和五十六年三月）、一一〇頁。または『全集第一卷』二九六頁。
- (14) 注(8)の二三九頁。
- (15) 『福沢諭吉全集 第四卷』（岩波書店、昭和三十四年六月）、三八頁。
- (16) 注(8)の二四〇頁。

- (17) 同右。
- (18) 『加藤弘之文書 第一卷』(同朋会出版、平成二年八月)、四一四頁。
- (19) 注(8)の二四〇頁。
- (20) 『漢文叢書 近思錄 伝習録』(有朋堂書店、昭和三年一月)、二七七頁。
- (21) 注(8)の二四〇頁。
- (22) 下出隼吉「明治社会学史資料」、『社会学雑誌』第十八号所収、七五頁。
- (23) 布川静淵「通」「社会学漫録」(『社会』第一卷第十一号所収)、一七三頁。
- (24) Hannibal Gerald: *Background for Sociology*, Duncan Marshall Jones Company, Boston, 1931, P.3
- (25) 川辺喜三郎『社会学序論講義案』(敬文堂書店、昭和九年四月)、三五頁。
- (26) 加藤弘之「社会学とは如何なる科学か」(『日本社会学院年報第壹年第四、五合冊』所収、大正三年六月)。
- (27) 注(23)の一七七頁。
- (28) 注(24)の三頁。
- (29) 注(23)の七七頁。
- (30) グロツパリ原著、高田保馬訳『社会学綱要 全』(有斐閣書房、大正二年十二月)、四頁。
- (31) *Larousse du XX^e siècle en six volumes, tome 6^{me}*, Librairie Larousse, Paris, 1933, P.386
- (32) 『哲学辞典』(平凡社、昭和六十三年十二月)、六二三頁。
- (33) 注(8)の二四八頁。
- (34) 「西周」(昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第三卷』所収、昭和三十一年六月)、一〇八頁。
- (35) 麻生義輝編『西周哲学著作集』(岩波書店、昭和八年十月)、三五五頁。
- (36) 注(35)の一〇頁。
- (37) 西周「自伝草稿」(『日本の名著 34』所収、(中央公論社、昭和四十七年一月)、二六八頁)。
- (38) 注(35)の三五七頁。
- (39) 注(35)の三五八頁。
- (40) 同右。

- (41) 海軍技術中将沢鑑之丞『海軍七十年史談』（文政同志社、昭和十七年十二月）、一六七頁。
- (42) 『赤松則良半生談——幕末オランダ留學生の記録』（平凡社、昭和五十二年十一月）、一六〇頁。
- (43) 同右。
- (44) 注(42)の一六一頁。
- (45) 「赤松大二郎航海日記」（『幕末和蘭留學關係史料集成』所収、（雄松堂書店、昭和五十七年二月）、三三三―三三四頁。
- (46) 注(42)の一六一頁。
- (47) ライデン市のフリーメイソンリー（會員相互の扶助と友愛を目的とする世界的秘密結社）の支部「ラ・ヴェルテュ」に、以前勤務した記録保管人アブラハム・フットハルス氏から、むかし得た來信によると、西と津田はレイデン滞在中、フリーメイソンになったという。西は一八六四年十月二十日に、津田は同年十一月十七日に入会した。
- (48) 注(42)におなじ。
- (49) 津田道治『津田真道』〔非売品〕（近世資料会、昭和十五年十一月）、七七頁。なお、大川喜太郎に関する史料に、「和蘭國へ軍艦製造依頼ノ節伝習為派遣セシ器械方職人大河原喜太郎死去通知一件」（東京大学史料編纂所蔵）がある。
- (50) 大道安次郎 山中良知 「日本社会学の黎明——西周のオランダ留學に纏わる一つの資料」（関西学院大学『社会学部紀要第七号』所収、昭和三十八年三月）。
- (51) 沼田次郎「ライデンにおける西周と津田真道——フィッセルینگとの往復書翰を通して」（東洋大学『大学院紀要 第19集 創設三十周年記念号』所収、昭和五十七年）、一二四頁。
- (52) 注(42)の一六一頁。
- (53) 大久保利兼編『西周全集 第二卷』（宗高書房、昭和三十六年十月）、七〇四頁。一八六三年六月十四日付フィッセルینگ覚書。原文は『幕末和蘭留學關係史料集成』所収の「五科学習關係蘭文編」一七九―一八〇頁にある。
- (54) 麻生義輝編『西周哲学著作集』（岩波書店、昭和八年十月）、三六二頁。
- (55) 同右。
- (56) *Nieuw Nederlandsch Biografisch Woordenboek, zesde deel, A. W. Sijthoff's Uitgevers-maatschappij Leiden, 1924, P.1080-1082*
- (57) 麻生義輝『近世日本哲学史』（近藤書店、昭和十七年七月）、六五頁。
- (58) 注(57)の三六三頁。
- (59) 『西周全集 第四卷』（宗高書房、昭和五十六年十月）、六一五頁。

- (60) 注(57)の「開題門」の一頁。
- (61) 注(59)の五九九頁。
- (62) 注(59)の六〇三頁。
- (63) 注(59)の六〇四頁。
- (64) 『西周全集 第一卷』(宗高書房、昭和三十五年三月)、二三頁。
- (65) 『明治文化史 4 思想言語編』(洋々社、昭和三十年三月)、一一〇頁。および注(59)の五九九頁を参照。
- (66) 注(59)の三〇〜三二頁。
- (67) 注(59)の一八〇頁。
- (68) 注(59)の四三三頁。
- (69) 早瀬利雄「明治初期における日本社会学前史の研究——社会学者としての西周とコントの実証主義」(『大倉山論集 第一輯』所収)、九九頁。
- (70) 『近代日本社会学者小伝——書誌的考察』(勤草書房、平成十年十二月)、五頁。
- (71) 注(64)の六二〇頁。
- (72) 注(64)の三六頁。
- (73) 注(59)の四八頁。
- (74) 同右。
- (75) 注(59)の六〇頁。
- (76) 注(59)の六一頁。
- (77) 注(59)の六三頁。
- (78) 注(59)の一六七頁。
- (79) 『明六雑誌』第三十八号「明治8・6刊行」の一頁。
- (80) 注(69)の一〇一頁。
- (81) 下出隼吉の「フェノロサと日本の社会学」(『社会学雑誌』第五十七号)によると、丹生川上神社の大宮司兼大講義であつた葵川信近の著述「北郷談」(神崎一作編輯『破邪叢書第二集』哲学書院、明治26・10)に、コントの実証哲学が「法ノ公多之駁悉滴夫教ノ説」と紹介されている、というが、同書を何度みてもこの字句を見い出せない。

- (82) 高山林次郎「明治三十年史 第一編 総論」(『太陽』第四卷十九号 臨時増刊所収、明治三十一年四月)、六頁。
- (83) 遠山茂樹「自由民権運動における士族的要素」(板根義久編『自由民権』有精堂、昭和二十三年七月)、一頁。
- (84) 注(84)の八七、八八頁。
- (85) 下出隼吉『社会平権論』解題(『明治文化全集 第二卷 自由民権篇』所収、(日本評論新社、昭和三十年一月)、三六頁。
- (86) 同右。
- (87) 柳田泉「社会平権論の訳者 松島剛」(『明治文化研究 新編 時代』第四卷第三号)、三六頁。
- (88) 同右。
- (89) 『社会学雑誌』十八号、七〇、七一頁。
- (90) 注(85)の三七頁。
- (91) 注(87)を参照。
- (92) 注(85)におなじ。
- (93) 「自由民権論とその当時の社会学」(『下出隼吉遺稿』(非売品)(下出民義、昭和七年四月)、二四九頁。
- (94) 内田魯庵「自由民権の想出」(『新旧時代 自由民権特輯』七五頁、または『内田魯庵全集 第三卷』(ゆまに書房、昭和五十八年十月)を参照。
- (95) 注(85)の四三四頁。
- (96) 『馬場辰猪全集 第二卷』(岩波書店、昭和六十三年一月)、八三、八四頁。
- (97) 注(85)の四四三頁。
- (98) 注(93)の二四五頁。